

魔法少女戦記リリカル
なのは I F

高町 由生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無印くA，sまでは劇場版とサウンドステージを混ぜた話になります。

空白期はBOA&GODと劇場版を混ぜた話と管理局の改革話になります。

STSは管理局の改革をした為にTV版26話をベースに完全オリジナル話になります。

VIVIDくVIVID STRIKE!は母親フェイトでのヴィヴィオのオリジナル話になります。

魔法戦記リリカルなのはFORCEは原作が未完結の為原作コミック以下の展開はオリジナル展開になります。

この小説が受け入れられない人や苦手な人はブラウザバックを推奨します。

なのは無印でINNOCENTみたいにアリサとすずかが魔導士になります。

なのは無印は劇場版ベースにテスタロッサ家側メインの話になります。

高町家にオリジナル主人公（なのはのいとこ設定で魔力はなのはやフェイトより下で執務官（STS）とデバイスマネージャー（STSのシャーリーやA'sのマリエル・アテンザ）両刀キャラ）が出てきます。

テスタロッサ家はプレシアとアリシア生存です。

八神家はアインスとツヴァイが両方生存します（アインスの救い方がちよつとチート）になります。

STSではスカリエツティ側の戦闘機人と人造魔導士が味方（管理局の改革で最高評議会の脳みそ達を空白期で倒す為）で敵はオリジナルになります。

キャラの竜が原作のフリード以外はモンハンの2頭（1頭はフロンティアのトア・テスカトラともう1頭はジンオウガ）になります。

モンハンのアイテム（プレシア救出）やモンスターも訓練相手として使います。

闇の欠片事件でなのは、フェイト、はやてにとある変化がおこります。

ジュエルシードの総数が21個から28個になります（うち7個は海鳴に散らばったユーノが発掘した赤いジュエルシードでアリシア復活の鍵になります）。

目次

魔法少女リリカルなのは編

それは始まりの言葉なの | 1

それは厳しい訓練なの | 5

それは始まりの宝石なの | 13

それは不思議な出会いなの? | 18

ライバル!? 5人目の魔法使いなの

27

ドキ!水着でプールで大ピンチなの?

前編 | 36

ドキ!水着でプールで大ピンチなの?

後編 | 42

ここは湯の町、海鳴温泉なの | 51

それは大切な願いなの? | 57

風の向こうの記憶なの前編 | 64

風の向こうの記憶なの後編 | 82

ジュエルシードの自然の驚異なの

98

砂竜のボスからジュエルシードを捕獲

せよなの | 105

ジュエルシード発動そして次元震の驚

異なの | 112

それは初めての共闘なの | 120

遂に出現その名は時空管理局なの

131

それは火の鳥、強大な竜種なの

		寒空の中の決闘なの	139
		ジュエルシード氷山の一角そして飛竜	
		種の登場なの	158
167	死闘海鳴市、火山での激闘なの		
	最終決戦海の上での共闘なの		176

魔法少女リリカルなのは編

それは始まりの言葉なの

これはまだ俺がフェイトと出会う前の物語、時空管理局の名も知らない小学3年生だった頃の物語。

SIDEプレシア

「なぜ！なぜなの!!、アリシアの記憶転写は上手く行った。なのになぜ!、どうしてアリシアと利き腕も違うし、あの娘はアリシアじゃない。あの娘の名前はそうねフェイトとでもしておこうかしら?」

「あなたの名前は今日からフェイトよ!、魔法の先生はリニスにお願いするつもりだから頑張りなさいフェイト。」

「はい母さん!。リニスって人はまだ会ってないから知らないけど、あとで会えるんだよね母さん。」

「あとでちゃんと紹介するわフェイト。さあ訓練室で待ってなさいフェイト。」

「はい母さん。」

「リニスはいるかしら?リニス。」

「なんですかプレシア?」

「今日から暫くの間私の娘のフェイトに魔法を教えて頂戴リニス。教え終わったらどこへなりとも消えなさい!」

「プレシア研究はやはり………。分かりましたプレシア。では、これから訓練室に向かいますねフェイトはそこでしょう?プレシア」

「ええそうよりニス研究は上手く行かなかったわりニス。フェイトは訓練室だから宜しくね。」

「分かりました、プレシア。では失礼しますね。」

「あなたがリニス?宜しく……お願い……します。」

「はい宜しくですよフェイト。頑張ればプレシアあなたのお母さんの役に立てますからね。」

「うん!私頑張るよりニス。」

「では訓練初日と言う事で今日は座学からやりましょうか?フェイト」

SIDEなのは

「ねえお兄ちゃん、今日から家でお世話になる私の親戚って男の子だったっけ?。凄く楽しみだなあ〜来るの。」

「嬉しそうだなくなのは!。今日来る従兄弟は男の子で間違いないぞ。父さんの剣術

の弟子だしな」

「お父さんの剣術って確か……、そっかそれじゃあちよつと怖い子なのかな？
お兄ちゃん」

「いや基本的にはなのと同じでも優しい子だぞ。まあ剣術やつてる時はちよつと怖いかもしれないが……。まあ見てみるのが一番だぞなのは。」

「うーん？早く来ないかな？その子。ねえお父さん？その子って特別な力とかないよね？お父さんみたいに怪我したりとかしないよね？」

「父さんみたいな怪我はそうそうしらないと思うが……、まあ剣術タコくらいはできるかもしれないな。」

「うーん色々心配になるな。なのはとしては。剣術もほどほどにしてほしいなあ。お父さんみたいに大けがされても困るし……。」

「暫くは父さんが入院してるし俺があの子の剣術修行を面倒見る事になるけどななのは。まあ父さんが退院するまでは仕方ないな。」

「仲良くできるといいなあ。その子と。同じ歳くらいだよねなのはと。」

「ああなのはと同じ歳くらいだぞ。なのは。仲良くしてやってくれなのは。」

SIDE 由生

「今日からお世話になる高町家って確か士郎さんが今入院中だったよな？俺も1回見

舞いに行つた方が良いんだろうか?。」

「まあもうそろそろ着くから全ては着いてからでいいか、士郎さんの事は心配だけだな俺としても。」

「そう言えば次女だつたつけ? なのはちゃんつて。士郎さんが入院して元氣失くしてないと良いけどなあ。俺とも仲良くしてくれるかちよつと疑問だし……。」

「由生君ゝ家に着いたわよく荷物降ろしましょうか? 私も手伝うから。」

「あつ! すみません桃子さん。手伝いお願いします。劍術修行用の竹刀とかもありませんから荷物に。」

「じゃあなのはと恭弥も呼んでくるわね2人だけじゃ荷物多すぎるし。」

「お願いします桃子さん。それと今日から宜しくお願いします。」

「はい由生君宜しくね、じゃあ恭弥となのは呼んでくるわね。」

こうして俺の高町家での生活が始まった。

それは厳しい訓練なの

SIDEフェイト

「さて、フェイトの魔力変換資質雷とフェイト自身の魔法の使い方は覚えましたね？では今日から訓練を始めようと思います。」

「訓練？ いったい私は何をすれば良いの？ リニス。」

「そうですね、今日は訓練初日ですし、まずは初級としてイヤンクック通称クック先生から始めてみましょうかフェイト。」

「クック先生？ それを倒せばいいの？ リニス。そのクック先生はどこにいるの？ リニス。」

「さて、それではクック先生のいる場所まで次元転移しますからねフェイト。ああそうそうクック先生との戦いはフェイト1人です。私はお手伝いしませんからねフェイト。」

「えっ!? 私1人で戦うの？ クック先生と。まだ魔法覚えたばかりなのに……私1人で出来るかな？ リニス。」

「大丈夫ですよフェイト動きをちゃんと見れば回避は出来るでしょうし、フェイトの

スピードなら当たらなければ致命傷にはなりません。ああそうそう一応ダメージ受けた時の為に回復薬を10個渡しておきますね。あとフィールドでの採取を忘れないようにしてくださいフィールドにはフェイトの役に立つアイテム等もありますので。」

「ありがとうございます。フィールドの素材によつてデバイスの強度が決まるんだよね？今後作る私専用の。フィールドもくまなく探してみるよ。私のデバイスともなるべく早く会いたいしね。」

「フェイトも頑張つてくださいね。あと回復薬等は調合によつても作れるのでフィールドで薬草を見つけたら調合してみてくださいね。では訓練を始めましょうフェイト。初めてなので制限時間は50分イヤクック1頭の討伐が目的です。」

「制限時間50分でイヤクック1頭の討伐だねリニス。でこのナイフは何？リニス。」

「倒したらそのナイフで素材を剥ぎ取つてくるんですよフェイト。ナイフは訓練には必要不可欠になりますからねフェイト。」

「解つたりリニス。じゃあ次元転移も終わったみたいだしフィールドに行つてくるねリニス。ナイフと時計は持ったしカバンには回復薬も持ったし準備完了だね。じゃあまたあとでねリニス。」

「頑張つてきてくださいねフェイト。終わったなら食事にしましょう。」

「うん！じゃあ行つてきますりニス。まずはこのマップ通りならベースキャンプつて所まで行つてみようかな？」

「ここがベースキャンプ、それじゃマップ通りならまずは1の方に行つてみようかな？つとその前に支給品BOXからアイテム貰わなきゃ。入っているアイテムは支給品の応急薬に携帯食料にガンナーの為の弾薬類か応急薬と携帯食料だけ持つてくかな？。さてそれじゃあマップ1に移動だね。」

「んくクック先生の姿は無しと。鉱石もあるしツルハシもベースキャンプにあつたから掘つておこうかな。へえく掘れたのは鉄鉱石2個とマカライト鉱石1個かくまあまあだねじゃあ引き続きクック先生を探しに行こうかな？次は2と3で別れてるのかく3に行つてみようかな。」

「あの特徴のあるトサカ頭は……あれがクック先生かな？見つけた。じゃあ戦闘開始つと。まずは様子見かなランサーセットファイア。」

「クケエエエエエエエエエ。クケツ！クケツ！クケツ！」

「おつと嘴で突いてきたか。じゃあこのまま魔法使つていくかな？次はこれでどうか？サンダー・スマッシュャー」

「クケエエエエエエエエエ。クエ！クエ！クエ！」

「今度は炎を吐いてきたか。じゃあこれでどうか？サンダー・レイジ！」

「グゲエエエエエエエエエエ。クケエ！クケエ！クケエ！」

「あつ！逃げた。追いかけてなくちや。その前にこのエリアの採取とかしなくちや。採掘完了。逃げたエリアは確かからだったよね。」

「クエ！クエ！クエ！」

「また炎吐いてきたか。ランサーファイア。」

「クケエエエエエエエエエエ。クケエ！クケエ！クケエ！」

「んくしぶといなあゝ撃ち抜け轟雷サンダー・スマッシュャー。これで倒せると良いんだけど……。」

「クツケエエエエエエエエエエ。クエ！クエ！クエ！」

「まだ倒れないのか。じゃあランサーセットフルオートファイア。」

「クツケエエエエエエエエエエ。クエエエエエエエエエ。」

「やつと倒れてくれたか。初めてだったし結構ダメージ受けちゃったなあゝあつりニスに貰った回復薬使おうつと。んく時間は20分経過か。この辺りの採掘だけしておこうつとクツク先生と一緒に。」

「採掘完了。じゃあフィールドを離れてリニスの元に戻ろうかな？。リニスく倒してきたよゝ20分くらいかかってダメージも結構受けちゃった方だけど。」

「お疲れさまでしたフェイト。じゃあ今日の訓練は終わりで戻りましょうか。明日か

らはまたクック先生との戦いが待っていますよ。」

「次からはもう少し被弾を減らす事が課題ですねフェイト。相手が魔導士の場合ダメージがもつとでかくて行動不能にされちゃいますよフェイト。」

「うんリニス私もつと頑張るね。」

「お疲れさまでしたフェイト。明日からはまた頑張りましょうね。今日はゆっくりとお休みくださいフェイト。」

SIDE 由生

「さて由生君明日から学校に通ってもらおう事になるけど聖祥大付属小学校で良いのよね?」

「はい構いませんよなのはとは別クラスでもいいです。学年は同じですし。」

「あつやっぱりなのはと同じ学年だったのね。少し大人びているから上かと思っちゃった。」

「じゃあ桃子さん明日からの学校生活も宜しくお願いしますね。なのはももし同じクラスなら明日から宜しくな。」

「うんっ! うんっ! 宜しくね由生君。同じクラスになれると良いなあ。アリサちゃんやずかずかちゃんにも紹介したいし。」

「俺は明日が楽しみ過ぎて眠れるかどうか分らなくなってきたよなのは。明日が楽し

みだ俺は。じゃあ俺は自分の部屋に行くなのは、桃子さん。じゃあまた明日。」

「うんお休みなさい由生君。」

「お休みく由生君。」

そして翌日の朝

「おはようございますなのは、桃子さん。」

「おはよう由生君。」

「おはよつ由生君。」

「今日から学校だけどなのも由生君も準備しなさい。一緒に学校に行く事になるから。」

「じゃあ一緒に行こう由生君。バスの中でアリサちゃんとすずかちゃんに紹介するね。」

「あ！ああ。じゃあ準備してくるからまたあとでねなのは。」

「うん！じゃあ準備の前に朝ご飯食べちやおう由生君。」

「ああそうだったなまずは朝ご飯かじゃあ頂きます。」

「ご馳走様でした桃子さん。じゃあなのは準備してくる。」

「ご馳走様お母さん。じゃあなのはも学校の準備してこようつと。」

「じゃあ行ってきますお母さん（桃子さん）」

「行つてらっしやい2人とも。気を付けてね。」

「はいお母さん」

「はい桃子さん。」

「由生君ここからバスに乗るから待つてれば来るからね。」

「ああじゃあ待つてようかな。」

「あつ！バスが来たよ。乗ろう由生君。」

「あつ！待つてよなのは。」

「あつなのはちゃんこつちこつち。」

「なのはこつちよこつち誰よ隣の子は。」

「なのはの従兄弟の高町 由生君だよアリサちゃんにすずかちゃん。」

「なのはの従兄弟の高町 由生ですアリサさんにすずかさん。宜しくお願いします。」

「アリサ・バニングスよ。アリサで良いわ由生。」

「月村すずかです。すずかで良いよ由生君。」

「じゃあアリサにすずか改めて宜しくな。」

「それでなのはちゃんなんで由生君がここにいるの？。」

「今日からなのはの同級生として学校に通う事になったのアリサちゃん、すずかちゃん。」

「なのはの同級生って事はあだし達とも同級生か。ならこれから宜しくね由生。」

「ああ宜しくなアリサ。」

そしてバスは学校につき朝のHR

「さて、皆さんこんな時期ですが今日から一緒に皆さんと勉強する事になった新しいお友達を紹介します。入ってきてください。」

「今日からここで一緒に勉強する事になった高町 由生です。皆さん宜しくお願いします。」

こうして俺もなのと同じ聖祥大付属小学校に通う事になった。

それは始まりの宝石なの

SIDE由生

聖祥大付属小学校での休み時間

「ねえねえ由生君って住まいはどこなの？」

「なあ高町とはどういう関係なんだ!？」

「海鳴市に来る前はどこに住んでいたの？」

「好みのタイプはいるの？」

「あ・あのお・お・お・お・お。」

「はいはい由生が困っているから一人ずつ質問する事。皆良いわね。」

「じゃあまずあたしから由生君ってどこに住んでいるの?。」

「住まいはなのはの家に居候しているよ俺。」

「じゃあ次は俺。高町とはどういう関係? 同じ苗字だけど」

「なのはとは従兄弟同士だよ俺。」

「じゃあ次あたしね。海鳴市に来る前はどこに住んでいたの?」

「海鳴市に来る前か。んくと確か関東の杉並区だよ」

「じゃあ次はあたし。由生君の好みのタイプって誰?。」

「俺の好みのタイプはそうだね。見た目が可愛くて、性格は大人しくて、髪の色が金髪で、目の色が赤眼の人が好みかな。」

その頃管理局では……

S I D E ユーノ

「ユーノ・スクライアさんにシャーク・スクライアさんにアイリ・スクライアさん3名とも第79管理外世界にロストロギアの発掘という事でよろしいでしょうか?。」

「はい(ああ(うん))それが目的です。発掘した物はおそらくロストロギアなので管理局で厳重封印してもらわなければならないですが……」

「それぞれデバイスはお持ちですか? デバイスがいない場合はロストロギア発掘の許可は出せませんが……」

「ボルグレインとフレイムディッシュとスノートライデントがあります。起動はちよつと上手く行ってないですけど……待機状態でも魔法は使えます。」

「了解しましたデバイスがあるなら問題ないです。では良い旅を。無事をお祈りしております。」

「ありがとうございます。シャーク。アイリ受付終わったよ。次の航行使で出発しよう。」

「了解だよユーノ兄さん（了解ですユーノ兄さん）。さて荷物も準備OKだしデバイスも準備OK。ああどんなロストロギアに出会えるのか楽しみだなあ。」

「わたくし私の方も準備完了ですわユーノ兄さん。どんなロストロギアが存在するのでしょうかね第79管理外世界には。」

第79管理外世界行き航行便間もなく発車いたします。お乗りの方は1番ゲートまでお急ぎください

「おつと搭乗時間みたいだし行くよシャーク、アイリ。」

そして第79管理外世界

「場所としてはだいたいこの辺りなんだけど、何か反応ない？シャーク、アイリ。」

「ロストロギア反応の他にはデバイスの反応が2つだけありますね。うち1つはベルカの魔力反応になりますユーノ兄さん。」

「ベルカの魔力反応？なんだろうそれっていったい。その場所を掘ってみようシャーク、アイリ。」

「あいよユーノ兄さん。」

「はいユーノ兄さん。」

「なんだろうこれ鎖で厳重封印された1冊の本？それと赤い宝玉？両方デバイスなのか？それと宝石？魔力を持った宝石？でもなんで赤が7個に青が21個あるんだろ

う?。」

「確かこの宝石はジュエルシードだぜユーノ兄さん。赤い方もジュエルシードなんだろうけど……とにかく嚴重封印して管理局の艦船呼んで運んで貰わないとユーノ兄さん。」

「うんそうだねシャーク。あとはこの白銀の本と赤い宝玉だけ持って行くしかないね管理局で調べて貰わないと。白銀の本の方は前にスクライア一族の文献で見た闇の書つてのに似てるけど……って本が消えた? いったいどこに行つたんだろう」

「ユーノ兄さんとにかく管理局に連絡しませんと。封印処理は私わたくしの方でしておきますので。」

「あつうん解つたよアイリ。封印処理はお願いねアイリ。」

「この赤い宝玉はユーノ兄さんが持つてくれ。」

「うんシャークその赤い宝玉を渡してくれ。管理局には連絡したし航行船はすぐに来ると思う。」

「ユーノ・スクライアさんですね。管理局航行船の物ですそのアタツシケースの身28個は私達が責任を持つて管理局までお届けします。」

「あつ! はいお願いします。中身はジュエルシード28個です。」

その頃時の庭園では。

S I D E プレシア

「フフフフフフフフ見つけたついでに見つけたわよアリシア復活の糧になるかもしれないロストロギアを。管理局までは航行船を使ってもかなり時間かかるし次元魔法でちよつとちよつかい出しませうか。」

「なぜ個数が28個で赤が7個なのかわからないけど青い方21個だけでもアリシアを蘇らせる事が出来るはず。はあああああああああ」

そしてジュエルシード28個は第97管理外世界地球の海鳴市に散らばった。

S I D E ユーノ

「えっ？僕達の頼んだ管理局の航行船が事故で爆発？じゃあジュエルシードはシャーク。」

「第97管理外世界地球の海鳴市って所に落ちたみたいだユーノ兄さん。ジュエルシードが暴走しているかもしれないし僕達で回収しないと。」

わたくし「私もお手伝いしますわユーノ兄さん。さあ参りませう。」

そして第97管理外世界で運命の出会いが始まった。

それは不思議な出会いなの？

SIDEユ一ノ

「あれがジュエルシード：：なのか？あれを止めなくちゃ駄目だねシャーク、アイリ。回収の為に戦うよ2人とも。」

「おうよユ一ノ兄さん。攻撃は俺に任せてくれ。防御はユ一ノ兄さん、封印はアイリお前がやるんだ。」

「はい私も兄さん達のお手伝いとしてサポートさせていただきます。シャーク兄さん攻撃はお任せいたしますわ。」

「私の名前はレイジングハートです。私を使ってくださいユ一ノ・スクライア。私にはアレを封印出来る機能があります。」

「赤い宝玉はインテリジェントデバイスだったのか：：。うん！わかったレイジングハート君の力貸してもらおうよ。」

「ただデバイスの起動にはあなた達では魔力不足ですので私はこの待機形態の状態で封印のみ担当させていただきます。」

「ボルグレインやフレイムディッシュやスノートライデントも満足に起動できないか

らおそらくそうだと思ってたけど、やっぱり面と向かって言われるとキツイね。」

「シャーク攻撃魔法を頼むよ。僕は皆を防御する。アイリはレイジングハートで封印を。」

「よっしゃ行くぜフレイムディッシュ。フレイムシューター、続けてフレイムアロー。」

「ガアアアアアアアアアアアアアアア！グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「プロテクション！。クツ攻撃が重いうわああああああああああああああ。」

「ユーノ兄さんうわああああああああああ。」

「ユーノ兄さん、シャーク兄さんきやああああああああああ。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「封印なる獣よ妙なる響きの中に返りなさい。レイジングハート封印を。」

「シーリング！」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「きやああああああああああああああ。」

「まずい！アイリ、プロテクション。」

「あつユーノ兄さん……。私も魔力切れでもう……。」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「逃げられちゃった……追いかけてくちや。あつ僕も魔力がもう……」
「俺ももう魔力が……。ジユエルシード早く封印しないと……」

「二誰か僕（俺）（私）（私）達を助けて……」

SIDEなのは

「なんだったんだろうあれは今朝は変な夢を見ちゃったな。あとでアリサちゃんや
すずかちゃんや由生君にも相談してみようつと。」

そして学校の昼休みになり

「ねえアリサちゃん、すずかちゃん、由生君相談があるんだけど。」

「もしかしてなのはも？」

「もしかしてなのはちゃんも？」

「なのはお前もか？」

「えっ？ どう言う事私もって。まさか皆も？」

「ああ、何かおかしな格好した3人の少年少女が何かの化け物と戦っていてそし
て……」

「あたしもそんな夢を見たのよ今朝。それで皆に相談したくってね。」

「私だけじゃなかったんだ……。それじゃあすずかちゃんも？」

「うんなのはちゃん。私もそんな夢で目が覚めて……」

「ここに居る全員が同じ夢を見るとか普通じゃねえな。まさかこれって予知夢とかじゃねえだろうな？」

「由生予知夢って何よ？」

「アリサこれから起こる事を夢に見る事を予知夢。既に起きている事だったら予知夢ではないが全員が同じ夢を見るとか普通じゃない。」

「これは夢の場所に放課後行ってみるしかない皆で。」

「ああそうだなすずか。放課後あの夢の場所に行ってみよう皆で。」

そして放課後海鳴市のとある公園で……

「誰か……助けて……。」

「なのは達も今の頭に響くような声聞こえたのか？これは行ってみるしかないな。」

「何これ倒れているのは鼬？フェレット？どっちなのよ！に犬に猫？」

「来て……くれたんだ……。」

「あつ！また気絶しちゃった。とにかく近くの動物病院に。」

「3匹とも怪我は大した事ないけど酷く衰弱してるし今日1日はこの病院で預かって明日以降飼い主を探した方が良くと思うんだ皆。」

「すいません先生では明日まで宜しくお願ひします。」

「それで犬はアリサの家で猫はすずかの家で飼い主が居なかった場合飼えると思うけ

ど、あの鮑？フェレット？みたいなのはどうする？とてもじゃないけどなのはの家で飼えるとは思えないけど……」

「あのフェレットさん家で飼えるようにお父さんとお母さんを説得してみるよ由生君。」

「良いのか？なのは。あのフェレット多分雄だぞ。」

「男の子って事？由生君。それでも説得してみるよ。」

「わかったなのは。じゃあアリサにすまかまた明日動物病院でな。」

「ええあの子も気になるしまた明日ね由生。」

そして夜中の時まで進み

「（助けてください……危険がすぐそこまで。」

「なのは聞こえたか？あのフェレットの声だ。」

「うん聞こえた。多分アリサちゃんとすまかちゃんも聞こえてると思う。」

「こつそりと動物病院まで行こうなのは。」

「なのは、由生。」

「なのはちゃん、由生君。」

「アリサにすまかもやはり聞こえてたかあの声が。」

「うん（ええ）。それで気になって来てみたんだけど……」

「なにこれ？ どういう状況よ中に入ったらめちやくちやつて。」

「皆あそこ。」

「来てくれたんですね皆さん。」

「それよりもあれは何？ 説明して。」

「あれはジュエルシードの暴走体。僕達の世界でいう化け物です。あれを封印して欲しいんですけど。」

「封印ってどうやるの？。」

「皆さんこれをそれぞれ。これはデバイスといってあれと戦う為の力になるものです。」

「皆さんそれを手にイメージしてください。自分の身を護る服と杖のイメージを。」

「とりあえずこれで。」

「二」スタンバイレディ、セットアップ。「三」

「凄いや魔法だ4機とも起動の呪文なしで起動した。」

「ユーノ兄さんこれならいける。」

「その白い服の子は封印に専念を。他の3人はそれぞれ攻撃をお願いします。」

「まずは俺から行くぜなのは、アリサ、すずか。フローズン・ソード。」

「ガアアアアアアアアアアア。」

「次はあたしね。いけっフレイムウィップ。」

「ガアアアアアアアアアアアア。」

「次は私ね。響けアイスシューター。」

「ガアアアアアアアアアアア。」

「あっ！逃げた。結構早いな。なのはって子封印出来る？。」

「大丈夫。リリカルマジカル。封印されるは忌まわしき獣ジュエルシード封印！」

「グオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「凄いい気に3個も封印するなんて。レイジングハートやボルグレイン等で触れてください。それで封印は完了です。」

「じゃあ今回は俺となのはとアリサで1個ずつ持つておこうそれでいいな2人とも。」

「うん。それでいいよ由生君。」

「ええいいわよ由生。」

「やばっ皆急いでここから離れよう。」

「えっ？なんで。」

「あの音が聞こえないのか？なのは」

「ウウウゝファンファンファンファン。」

「あっ！やばっ。ごめんなさ〜い。」

「じゃあアリスちゃん、すずかちゃんまた明日学校でね。それと犬と猫は宜しくね」

「じゃあまた明日ねなのはちゃん。」

「じゃあまた明日ねなのは。」

「俺達もこつそり出てきたし帰ろうなのは。フェレットの事は説明すればわかってもらえるさきつと。」

「うんそれじゃあ帰ろうか由生君。」

その頃時の庭園では

SIDEプレシア

「フェイトはいるかしら？フェイト」

「なんですか母さん。」

「フェイト第97管理外世界の地球という星に母さんの研究に必要なものが散らばってしまったの。28個のジュエルシードを全て回収してきて頂戴。うち7個は赤いジュエルシードだけどそれはどうでもいいわ。青い21個だけでも回収できれば母さんの研究は成功するから。」

「はい母さん必ず21個は手に入れます。行こうアルフ。」

「くれぐれも母さんを失望させないで頂戴フェイト。」

「はい母さん。」

そして運命は静かに回り始める

ライバル!? 5人目の魔法使いなの

SIDEフェイト

「ここが母さんの言つてた第97管理外世界地球。ここに母さんの求めるジュエルシードがあるんだ。アルフ早速この辺りの住まいの検索お願い。貯金は母さんの口座からまだ使えるはず。」

「あいよフェイト。ここは日本の遠見市つて所みたいだ。近場の物件だとあの高層マンションの最上階辺りが借りれるねえ。どうするんだい？フェイトあそこで良ければすぐにでも交渉してくるけど?。」

「あそこならいい場所だねアルフ。じゃあ早速だけどアルフは交渉をお願い。賃金は口座振り込みでね必ず。あとアルフはこの世界では大人つてのに変身してくれる?そうじゃないと子供だけだと借りれないみたいだから。」

「じゃあちよつと行つてくるねフェイト。すぐ終わるからそれまでここで待つておくれ。あとプレシアに言われたジュエルシードを探索するのも良いかもねフェイトは。管理局が動いてからじゃ遅すぎるし……。」

「じゃあちよつとサーチャーを設置して探してみるねアルフ。アルフはマンションの

賃貸お願いね。バルディツシュ広域サーチお願いね。」

「YES SIR.」

「この近辺にジュエルシードがあると良いんだけど……?。あれっ?これって魔力反応だねバルディツシュ。」

「この反応は魔力以外に炎熱の反応がありますサーフェイト。おそらく現地生物を取り込んだジュエルシードがモンスター化したかと思われまます。」

「炎熱反応に現地生物を取り込んだ反応か?もしかしてリニスの特訓で相手したようなモンスター?バルディツシュ。あれに炎熱反応持ってたのがいたような……。だとしたら厄介極まりないんだけど……。」

「もしかしたらこの反応炎王龍と炎妃龍かもしれないですね近くで2つの炎熱反応がありますから……。」

「炎王龍と炎妃龍って正直同時に相手したくない組み合わせなんだけど……。バルディツシュ。はあああああ言っても仕方ないかバルディツシュに。アルフの方はまだ時間かかるみたいだし行こうかバルディツシュ。」

「GET SET.」

「グルアアアアアアアアアア、ガアアアアアアアアアアア。」

「本当に炎王龍と炎妃龍とはね……。しかも一匹色違いだしもしかして赤いジュ

エルシードからの暴走体?。だとしたら厄介極まりない相手なんだけど……ど
うしようもないねこればかりは愚痴言っても。じゃあやろうかバルディツシュ。」

「PHOTON LANCER FULL AUTO FIRE。」

「グルアアアアアアアアアア。グルアアアアアアアアアアアア。」

「やっぱり熱い。これは直撃したら火傷どころじゃすみそうもないねバルディツ
シュ。」

「大型の魔力反応2名接近中。管理局ではないと思いますが魔導士の可能性大。どう
しますかサーフェイト。」

「魔導士が2名つて確かこの世界に魔法は存在しないはず?。いったい何者?。」

「あと5分くらいで到着しますサーフェイト。」

「それじゃあそれまで頑張ろうかバルディツシュ。」

「YES SIR。」

そして時間は少し巻き戻り放課後の聖祥大付属小学校へと戻り

SIDEなのは

「じゃあアリサちゃんにすずかちゃん今日は塾のお稽古頑張つて。ジュエルシードが
発動したら私と由生君の2人で何とかするから。」

「アリサとすずかは勉強頑張つてな。なのはと何かあればちゃちゃつと片付けてくる

「レイジングハートバスターを。」

「バルディツシランサーセット。」

「グルアアアアアアアアアアア。ガアアアアアアアアアアア。」

「2人は封印出来るんだよな？これを。」

「うん出来るよ由生君。」

「はいできます。」

「じゃあボルグレインもう1発スラツシユ。」

「グルアアアアアアアアアア。ガアアアアアアアアアアア。」

「今だよつてうわあああああああ炎が熱い。」

「封印されるは忌まわしき器ジュエルシード封印。」

「グルアアアアアアアアアア。ガアアアアアアアアアア。」

「封印は何とか終わったかあちち少し火傷したわなのは。」

「大丈夫？由生君。」

「あのもしよければこれ使ってください。」

「んっ？火傷治しじゃないかこれなんで君が持つてるの？これを。」

「私訓練でああいうの相手に訓練してたから常備だけはしてるのアイテムの。」

「それはとても助かるわ君じゃおかしいな名前は。」

「あつフェイトです。フェイト・テストロッサ。」

「フェイトちゃんか助かるよ。それでフェイトちゃんもやはりジュエルシードが狙い？だとしたらお互い譲れないし戦わないとならないはずなんだけど。」

「私はそつちの赤いジュエルシードはいらないから青いのだけを回収したいんだけど……。」

「じゃあ赤いのは俺が、青いのはフェイトにやるつて事で良いかな？なのは。」

「うんそれで私は構わないよ由生君。」

「あとフェイト出来れば俺はフェイトに惚れたつぽいんで次回からフェイト側でお手伝いしたいんだけど良いかな?。」

「あつ・えつ・わ・・私に惚れたつて私が可愛いつて事?由生。」

「ああそう言う事だフェイト。もつとも一緒に住むつて事は出来ないけどなまだ年齢的に。」

「じゃあまたなフェイト。今度戦場で会つた時はおそろくなのは側は3人の魔導士になつてはるはずだから気をつけてな。」

「じゃあまたね由生。今度からは手伝つて貰うからねジュエルシード集めを。」

「ああじゃあまたなフェイト。」

「由生君フェイトちゃんに惚れたつて本当でしょ?まだ顔が赤いし。」

「べ・別にいいだろうなのはには関係ないんだから。」

「へえ、そんな事言うのはこの口かな？ 由生君。」

「すみませんでしたなのは様。」

「へっ？なのは様って由生君……。」

「じゃあ帰ろうぜなのは。」

「う・うん。」

そして再びフェイトサイドでは

SIDEフェイト

「お帰り、フェイト。賃貸の片片付いてるよ。住むには問題ないけど掃除だけはしない」と。

「私の方はジュエルシードを1個回収したよアルフ。赤いのは回収してないけどね。」

「プレシアの方でも赤いのはいらないうって言ってたし順調じゃないかフェイト流石あたしのご主人様だね。」

「次回からは私と同じ歳の男の子が手伝ってくれる事になったからねアルフ。」

「ふーんそっかフェイトと同じ歳の男の子か、そいつはあたしも楽出来て良いね。会うのが楽しみだよ。」

「なんか私が可愛いから惚れたとか言ってたけど……。」

「な・なんだって。まあ確かにフェイトは可愛いから惚れるのはわかるけど……
そいつって魔導士かい?。」

「うん管理局の魔導士じゃないと思うけど魔導士なのは間違いないねアルフ。まあ喧嘩だけはしないでねアルフ。」

「フェイトがそう言うなら喧嘩だけはしないよフェイト。まあ頼りになると良いんだけどねあたしとしては。」

「あれで特訓すればすぐにも私と同じで強くなると思うよアルフ。まあ訓練スペースがないから厳しいかもしれないけどねこっちじゃ。」

「あれなら確かに強くなるね。まあこっちじゃ使える場所なさそうだけど……。」

「じゃあ今日は疲れたからおやすみなさいアルフ。」

「あいよおやすみ〜フェイト。」

こうして夜は更けていった。

ドキ！水着でプールで大ピンチなの？前編

SIDEなのは

「そう集中して心の中にイメージをするんだなのは。そのイメージを手にした杖にレインングハートに渡して。」

「イメージを魔力に、リリカルマジカル捕獲魔法発動。って成功した？ユーノ君。」

「いや！成功してない。うわあああああああああ。」

「アリサ、イメージを魔力にフレイルムディッシュにそのイメージを送り込むようにして。そのまま空を飛ぶイメージを。」

「人間そう簡単に空を飛べるようになるなら苦労しないわよシャーク。イメージしたって空を飛べるわけないでしょー！。」

「すずかそのまま対象を防御するイメージを杖に。どんなに遠くにいる人も守れるようになるイメージを。」

「ん〜難しいよアイリ。人と離れた状態で防御魔法の展開がこんなに難しいなんて思わなかったよ〜。」

「3人とも攻撃や防御魔法は基礎をきちんと覚えたとその延長線上なただけどなあ

く。難しい技術はないんだけどねえ。なのは今は捕縛魔法、アリスは飛行魔法、すずかは遠くへの防御魔法展開。まあそれなりに技術は必要になるんだけどね。」

「それよりなのは、すずか今日の約束忘れてないでしょうね?。」

「あのバス停近くに新しく出来たっていうプールの約束でしょアリスちゃん?。」

「アリスちゃんちゃんと覚えてるよ。今日の放課後が楽しみだね。あつ勿論ユーノ君とシャーク君とアイリちゃんも一緒に来るんだよ。」

「えっ!僕達もなのは。どうするシャークにアイリ。」

「まあプールくらいなら息抜きにいいんじゃないか?ユーノ兄さん。ここの所ジュエルシード探しに忙しかつたしな。」

「プールならいいんじゃないでしょうか?ユーノ兄さん。私達にも休息は必要ですし……。」

「ところで由生はどうするの?なのは。流石に誘わないってのはかわいそうだし。」

「んく由生君も誘ったんだけどねえ、もう1人の魔法少女の彼女が気になるみたいでそつちに同行するって言ってた。」

「金髪赤眼のフェイトって言ってたっけなのは。そつちに協力してるって事?由生は。」

「うん惚れちゃったみたいでそつちに協力するって言ってた由生君は。なのは達にも

協力して欲しいんだけどねえ。」

「惚れたねえ、由生君結構優しいところあるからねえ。そのフェイトちゃんに何か感じる部分があつたんだろうねえ。」

「そうだと思うけどあれは一目惚れだったよ、すぐさちゃん。一目惚れであそこまで協力するって事はそうそうないと思うんだよねえ。」

「一目惚れか、それはしようがないねなのはちゃん。それにしても何が一目惚れの原因なんだろう？好みのタイプだけって事はないよね？なのはちゃん。」

「多分好みのタイプだけって事はないと思うの、すぐさちゃん。多分自分に対しての何かがあるから協力してるんだと思うの。」

「じゃあなのは達も今日の訓練はここまででそろそろ学校の時間だよ皆。放課後の訓練は今日はプールだからしただけだね。」

「今日の放課後は本当に楽しみなよ、ユ一ノ君。由生君がいないのは少し残念だけどね。」

そして時間は放課後まで進み

「さて土日は半日授業だから楽でいいよねえ、アリサちゃん、すぐさちゃん。」

「そうねなのは、由生はこれからフェイトって人の所？」

「ああそうだけアリサ。俺は暫くはあっち側でのジユエルシード集めになるからな。」

くれぐれも邪魔だけはするんじゃないやねえぞと釘だけは刺しておくからな。邪魔するんなら戦つてでもぶつ叩くからなお前らを。」

「ふーんいい度胸じゃない由生。それならあたし達の邪魔するんなら由生でもぶつ叩くからね。どつちがジュエルシードを集められるか勝負しようじゃない。」

「面白えじゃねえかアリサ。良いぜその勝負受けてやるよ。ただし赤いジュエルシードは俺が貰うからね。」

「赤いジュエルシードは確か暴走体も強力だったかしら。弱点さえつけければ大丈夫そうだしあたしの弱点が出てきたらあたしが倒しちゃうからね。そうなくても恨まないでよね。」

「ほおおおお随分強気に出たなアリサ。まあその方がアリサらしいけどな。でもあのモンスター達の弱点はバラバラだから前回は偶然俺が得意な属性だったけどなのは。」

「もし赤いジュエルシードがあつたらそつちに連絡するね由生君。それに関してはお互い協力するつて事にした方が良いと思うの!。怪我してからじゃ遅いし。」

「それもそうだなじゃあ赤いジュエルシードに関してはお互い協力するつて事でいこう。アリサ達にもこれ渡しておくな。これでたいいのモンスターはわかるから。」

「うんありがとう由生。でもこれに載つてないモンスターがでてきたらどうするの

?。由生。」

「う〜んたいていのシリーズモンスターならそれに載ってるから俺が書き込んだしな実際問題。新種に関しては俺にも分らん。出てきたらその時対処だな。」

「わかった由生君。これ大事に使わせてもらうよ。とりあえずそつちも頑張つてねジユエルシード集め。」

「ああじゃあまた来週なアリサ、すずか、なのは。土日はあつちに泊まり込みで訓練漬の毎日だよ俺はな。」

「じゃあ特訓頑張つてね由生君。なのは達は約束通りこれからプールだから。あと由生君もたまにはフェイトちゃん誘つてプールとか行った方がいいよ。これはなのはからの忠告。」

「じゃあ今度誘つてみるわなのは。今日は訓練だからどうしようもないけどな。」

「別に今日でも良いんだよ由生君。ちよつと念話で聞いてみてよ。」

「フェイトちよつといいか?今日の予定なんだけどな一緒にプールでも行かないか?」

「プールくらいなら今日でも良いけど急にどうしたの?由生。訓練に励んでたじゃない最近はこつちで。」

「なのは達がプールに誘えつてうるさいからさ。それで聞いてみたんだが、水着つて

の持ってるか?フェイト。」

【水着ってのは持ってないけどバルディッシュに頼めばどんな格好でも出来るよ由生。】

【そうか、じゃあ今日バス停前に新しくできたっていうプールに集合なフェイト。なのは達も同じ場所だけど良いよな?別に。】

【うんじゃあまたあとでね由生。他に持って行くものは?】

【バルディッシュ忘れてたら裸で泳ぐ事になるからバルディッシュユ忘れるなよフェイト。それ以外はこの世界のお金が必要になるけどそれは俺が出すからフェイト。】

【じゃあバルディッシュだけ持って行けば大丈夫だね由生。それじゃあまたあとでね。】

【ああまたあとでなフェイト。】

「さて、フェイトもOKだって事になったし俺もお前らと一緒にプール行くわ。」

「じゃあ一緒に行って待ち合わせすればいいね由生君は。」

「ああそうなるなすずか。今日1日は宜しくな皆。」

後編へと続く

ドキ！水着でプールで大ピンチなの？後編

SIDEなのは

「アリサお嬢様、すずかお嬢様、なのはお嬢様お待ちしておりました。お迎えに上がりました。って由生様も一緒でしたか、今日はご一緒出来ないと聞かされておりましたので少し驚きです。」

「あつファリンさんご無沙汰してます。今日是一緒に行けるようになったので一緒にさせてもらってます。あとでもう一人合流予定ですが構わないですか？名前はフェイト・テストロツサつて言います。」

「フェイトお嬢様ですか……わかりました由生様。到着いたしましたらご紹介してくださいねその時はお世話いたしますので。」

「ファリンさん宜しくお願いますね。「フェイト少し良いか？お前が着いたらアリサやすずかやすずかの家のメイドさん達やなのはの姉にお前を紹介する事になった。」」

【紹介？私を。それは別に構わないけどなんて紹介するつもりなの？まさかジュエルシード集めを手伝つてるとか言わないよね由生。そんな事したら余計混乱させちゃう

よそつちを。」

【その点は心配するな。訳あってある物の回収を手伝っているお嬢さんって事で紹介するから。まあどこのお嬢さんって聞かれても困るけどな(笑)。】

【それなら問題ないね。あともう少しでそつちに到着するよ由生。着いたら手を振るから振り返してね。】

【ああわかったそれくらいなら問題ないさこつちもな。あと水着はファリンが用意してくれてるからそつちから選んでくれフェイト。】

【わかったよ由生。じゃあまずはファリンさんに挨拶かな私は。そのあとは由生に泳ぎを少し教えてもらうくらいかな?フフ。】

【まさか泳げないのか?フェイト。泳げないんだつたら悪かったな誘ったりして。】

【泳げるよちゃんとりニスに泳ぎの基本は教わったし。ただ泳げると言っても戦闘しながら泳ぐ感じのが多かったからそれで……。】

【ああ例の戦闘訓練で泳ぎながらの戦闘訓練したって事か。じゃあ普通に泳ぐだけってのは初めてって事か。じゃあ少し教えてあげるよ泳ぎ方を。】

【うんよろしくね由生。】「おい由生く着いたよ。」

「おくこつちだフェイト。ファリンさんこちらがある物探しを手伝っているフェイト・テスタロッサです。」

「フェイトお嬢様初めまして。月村家でメイドをしておりますファリン・K・エーアリヒカイトと申します。今日一日皆様のお世話をさせていただきます。なのはお嬢様、アリサお嬢様、すずかお嬢様が現在こちらの中で水着を選んでおりますのでフェイトお嬢様も水着をお選びください。」

「あつフェイトちゃんきたんだ。こつちで一緒に水着選ぼうよ。」

「初めてなのでよろしくおねがいます。水着なんて初めて着るよ私。どれにしようかな。つてこれなんか私のバリアジャケツトに似てて良いかも、由生も喜ぶかな?。(某RPGの危ない水着をイメージしてもらえればわかるかと。)」

「フェイトちゃんそれを着て喜ぶ人は一部の特殊な人だけなの。無理しないで良いからワンピース型から選んだ方が良いと思うよその方が由生君も喜ぶから。それにフェイトちゃんの体形じゃその水着を着たら色々と血の海が想像できるの(笑)。アリサちゃんとすずかちゃんにフェイトちゃんを紹介するからちよつと待っててね。アリサちゃん、すずかちゃん。こちらフェイト・テストタロツサちゃんなの。こちらアリサ・バニングスさんに月村すずかさん私の友達だよフェイトちゃん。」

「初めましてで良いのかな?アリサにすずか。紹介されましたフェイト・テストタロツサです。あなた達もジュエルシードを集めているんでしょ?だったら私や由生の邪魔はしないでね。」

「フェイトあなたもジュエルシードを? いったい何の為に……. あたしは水着これにしようつと。」

「フェイトちゃん理由^{わけ}を教えて。そうじゃなきゃぶつかり合っても仕方ないと思うよ。なのははこれにしようく水着。」

「フェイトちゃん私達に出来る事はないの? 由生君の負担も軽くしたいしフェイトちゃんとは戦いたくないよ。わたしはこれにしようかな水着。」

「理由^{わけ}は教えられない残念だけどね。私は黒のこの水着にしようかな。由生喜んでくれるといいなあ。」

「フアリンさん水着は全員OKです。じゃあフェイトちゃんは由生君と一緒に入ってね受付。」

「かしこまりましたなのはお嬢様。由生様も水着は準備出来たみたいなのでフェイト様は由生様と一緒に。」

「じゃあ行こうぜフェイト。料金は子供2人分でお願ひします。」

「子供2人分で360円になります。」

「はい360円。じゃあ更衣室は別々だから更衣室でさつき選んだ水着に着替えてきてくれフェイト。」

「うんわかった。私はどっち行けばいいのかな?。」

「フェイトちゃんはなのは達と同じでこっち。じゃああとでね由生君。」

「あああとでなのは。フェイトの事は頼んだぜ。」

「じゃあ行こうか？フェイトちゃん。更衣室は広いんだよ。」

そして時間は少し経過して

「お待たせ由生君ってアリサちゃんにお兄ちゃんもう着替え終わってたんだ。速いなあ。」

「美由紀あの事もあるし荷物はちゃんと見張ってるよ。」

「わかってるよ恭ちゃん。あたしに任せといて。」

「恭也さんあの事って?。」

「ああ先週ここで女性の荷物を盗む輩がいたんだよすかちゃん。だから用心に越した事はないと思ってるね。」

「女性の荷物をですか、それって痴漢ですか？恭也さん。だとしたら気持ち悪いです。」

「痴漢とはちよつと違うんだけど女性の荷物から服とかだけを盗む泥棒がいたって話でねすかちゃん。」

「由生ちよつといい?ここにジュエルシードの反応があるよそれも赤いの1個に青いの1個。またモンスター化するといけないし探しに行かない?由生。」

「赤いジュエルシードと青いジュエルシードがあるのかここに。なのは達にまだ赤いのは強すぎて厳しいし俺達で探しに行こうかフェイト。」

「恭也さんちよつと俺とフェイトで周辺の警戒に行つてきますね。荷物奪われたら厄介ですし、何より同じ男としてそういう輩は許せませんから。」

「あくすまん由生。先週捕まっているんだその男は。でも念の爲つて事で美由紀には話したんだが……。」

「それでも脱獄してたら厄介ですからやっぱり周辺警戒してきますフェイトと。」

「そこまで言うなら行つてこい由生。ただしフェイトちゃんを怪我させないようにな。」

「フェイト許可は出たし行こうぜ探しに。」

「うん行こうか由生。多分ボイラー室の方だと思うそこら辺からジュエルシードの反応がするから。」

そしてボイラー室周辺で

SIDEフェイト

「なつ!こいつはナバルデウスじゃないかフェイト。フェイトの変換資質が弱点のモンスターだ。ボルグレインセットアップ。」

「ナバルデウス確か深海に生息してるモンスターだったよね?なんでこんな所につて

いつの間にか部屋が深海になつてる。バルディツシユ行くよ。」

「SET UP。」

「GET SET。」

「バルディツシユランサーセット。」

「ファイア。」

「ボルグレインランサーセット。」

「シユート。」

「ガルアアアアアアアアアアアアアアアア。グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「深海だからか動きがぐああああああああああああ。」

「由生！バルディツシユサイズフォーム。アークセイバー。」

「ARC SABER」

「バルディツシユデバイスフォーム。サンダースマツシヤ。」

「グ

ルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア、

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「ボルグレイン。シユーターセット。ファイア。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「今だフェイト。封印を。」

「忌まわしきはジュエルシード、許されざる物を封印の輪に。ジュエルシード封印。」
「SEALING。」

「やっぱり赤いジュエルシードかこっちは。俺が貰うなフェイト。ボルグレイン。」

「SEALING No.23。」

「あとなのは達の方に1つ気配を感じるなそっちは今回はなのは達にくれてやろうフェイト。」

「仕方ないね今回は赤いののが相手ができる事が判明したってだけで勉強になったよ。」
その頃なのは達の方でも

SIDEなのは

「あくもう犯人はジュエルシードに願ったのね女性の下着や衣服が欲しいってシャーク。」

「ああその結果がさっきの触手だ。しかしこいつはヤマツカミとか言ったか?なんでこんなのがジュエルシードの暴走体なんだよ。」

「弱点はすずかみたいねすずか攻撃よろしくね。あたしとなのはが援護するわ。」

「スノートライデント。フローズンバスター。」

「フレイムディッシュ。フレイムスラッシュ。」

「レイジングハート。デイバインバスター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ン。
グ

ルウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ。

【なのはいくらやつても分裂しちゃうし一か所に纏めて封印しないと元の木阿弥だ。】

【それなら今日の早朝練習の応用編なの。レイジングハートお願い。】

「レストリストロック」

「忌まわしきはジュエルシード、許されざる物を封印の輪に」

「SEALINGNo17」

「今日はすずかちゃんだけ持ってなかったしすずかちゃん。」

「スノートライデント。」

「SEALINGNo17」

「これで皆一個ずつ持った事になるし次からは争奪戦だね。」

「次から複数出てきたら倒したものが入手するでいいわねすずか、なのは。」

「文句なしだよアリサちゃん。」

「由生達の方も終わったみたいだし今日はこれで解散だわ。」

そして舞台はまた少し時間が経過する

ここは湯の町、海鳴温泉なの

SIDEフェイト

「ねえ由生近くに温泉街があるんだけど、一緒に行かない？アルフと私と由生の3人だけで。」

「わ・わかったから耳元で囁くように言うなフェイト。って誰からそんな事教わった？まあだいたい予想はつくけどな。」

「由生あんまり嬉しくなさそう。そんなに私の事嫌い？アルフがこうすれば由生が喜ぶって聞いたんだけど。」

「嬉しくない訳じゃないさフェイト。だた耳元で囁かれるとくすぐったいだけだ。それとア〜ル〜フあとで模擬戦な全力全壊で。フェイトにまだそんな事させるんじゃないですね。」

「わかった・わかったから落ち着いて由生。それと壊の字が間違ってるように見えるんだけど気のせいだよな？由生。」

「いいや間違ってるないよアルフ。これで正しいのさ俺の場合はな。だからあとできっちり全力全壊で模擬戦しような？アルフ。」

「うう〜フェイトあたしまだ死にたくないよ。由生顔は笑ってるけど心から笑ってないから怖いよ〜フェイト。」

「由生あんまりアルフを怖がらせないでね。私の大事な使い魔なんだから。温泉行く時ってどんな姿が常識的だったっけ？由生。」

「温泉行く時は基本的には宿に備え付けの浴衣にスリッパだな確か。あとは部屋に備え付けのタオルとバスタオルを持って行くんだ。アルフ温泉が染みると良くないから模擬戦は今回は勘弁してやるよ。」

「ありがとう由生。あんまり由生をからかうような真似だけはしないようにするよあ」とが怖いしねあたしも。そう言えば気になってるんだけど浴衣の下は何も着けないのかい？」

「昔は浴衣って言ったたら素肌の上に直接羽織る感じだったけど最近は浴衣の下は下着でもいいみたいだよアルフ。あとおそらくただけなのはやアリサやすずかも温泉街には来ると思う毎回3家族合同で温泉街行ってるって言ってたからなのはが。だからおそらく今回はジュエルシードは早い者勝ちになると思う。正直フェイトの方がまだ強いと思うけどな戦ったとしても。」

「温泉街近くで発動前のジュエルシード反応をキャッチしたから誘ってみただけそうか彼女達もジュエルシード集めてたねそう言えば。アルフもし彼女達に会ったら少

し牽制入れといてくれる？ガブツと行くって感じで言っただけから。」

「わかったよフェイト。会えば牽制しとけばいいんだね。でもそれだと次に会った時からは彼女達と戦う事になるけどいいのかい？フェイト。由生もあんまり知り合いとは争うなって言っただけだ。」

「彼女達とは遅かれ早かれジュエルシードを巡って争う事が決まっているんだアルフ。早いか遅いかの違いだけだよ正直な話な。」

「それなら別に気にしないけどせっかくフェイトに出来た友達かもしれない娘と戦うのはちよつと思っただけでね由生。」

「ああ確かにそれは俺も思う所があるけどなアルフ。気にしてたって仕方ないんだ邪魔する奴はぶつ飛ばしてでも通らなきゃこつちの言い分は通用しないよアルフ。」

「確かに由生の言う通りか。分かったあたしも気にしないで戦うよフェイトの為に。」
そして温泉街出発当日の朝

「じゃあ行先までのお金は俺が出すからな車の運転は子供だけじゃ出来ないしアルフも免許証持っていないから運転できないしな。だから目的地までは電車を乗り継いでいくよフェイト、アルフ。」

そして温泉街に到着したフェイト一行様はと言うと

「じゃあ俺は今から戦闘の舞台になる場所の下見に行ってくる。魔力撃ち込まなきゃ

ジュエルシードだつて暴走体は現れない訳だしな

「じゃあ私は部屋でのんびりしてるよ由生。何かあつたら呼んでね。」

「じゃああたしは周りの散歩でもしてこようかね。その後はフェイトと一緒に温泉行こう。」

「アルフが帰つてきたら私とアルフは温泉行つてるから念話お願いね由生。」

「ふくんやっぱり来てたんだねおチビちゃん達。フェイトと由生の邪魔をしたらガブツていくからねガブツて。だから大人しくしてるんだよおチビちゃん達。」

「フェイトちゃんと由生君も来てるの?ここに。だったら会わせて話をさせてください。何もわからないままぶつかり合うのは嫌だ。」

「合わせる訳には行かないねくおチビちゃん。それとも今ここでバトルを始めるのかい?それでもこっちは構わないんだけどねえ。」

「わかつたわよ!じゃあこっちが勝つたらそっちのジュエルシードを貰う。こっちが負けたら一人だけ手持ちのジュエルシードをあげる。これでどうかしら?そこのお姉さん。」

「威勢がいいねえくその金髪のおチビちゃん。いいよその条件のつたよ。」

「じゃあまた夜にでも会いましょう。それまではお互い干渉しないつて事で。」

「あいよそれじゃあまた夜にでもなおチビちゃん達。」

そして時間は夜になりジュエルシードが発動した。

「ジュエルシードが発動したぞフェイト、アルフ。手早く済ませるよあいつらも多分気配には気づいているだろうしな。」

そしてジュエルシードの封印を終えた直後

「やっぱりジュエルシードだったねアリサちゃん、すずかちゃん。つてもう終わって
る。」

「やっぱり来たねなのは、アリサ、すずか。悪いけど母さんの研究の為にこのジュエルシードは渡せない。」

「私達だってユーノ君達のお手伝いの為にジュエルシードは渡せない。さて、誰VS誰かしら？ 戦うのは。」

「戦う相手はこの魔法で決めよう。」

「ふむ決まったね。戦うのは僕た高町由生と高町 なのはに決定された。」

「ボルグレイン 「レイジングハート。」」

「SET UP」

「さて、先行はこつちが貰った。アイシクルファンク。」

「きやああああああああああ。今度はこつちの番だよレイジングハート。D
i
v
i
n
e
b
u
s
t
e
r。」

それは大切な願いなの？

SIDEフェイト

「由生、あれはいつたい何をしているの？お互いに丸い玉を追いかけてるけど？」

「あああれはサッカーって言うてな。あの白と黒の丸い玉を相手ゴールまで蹴って
いってゴールポストの中に玉が入れば1点ってスポーツだな。ちやうど今試合してる
チームの片方は翠屋J・F・Cと言うてなのは父親が監督を務めているチームだな。
あれが気になるのか？フェイト。」

「ううん由生あのゴールキーパーやってる男の子なんだけどさ、ジュエルシードを
持つてるよ発動前のを。あれが人間の願いで発動する前に回収しないと厄介な事にな
るよ。」

「本当か？フェイト。アルフ念の為サーチしてみてくれ。もし本当だったら厄介な事
この上ない。」

「ちよつと待つてな由生。サーチ結果だけどフェイトの言う通り持つてるね発動前の
封印されてないジュエルシードを。あのおチビちゃん達に気づかれずに回収するのは
難しいよ由生。どうする？今回は諦めるかい？。」

「なのは達に気づかれずに回収するのは難しいかアルフ。そうなたらぶつかり合うしかないから今回はスルーするしかないな。すまんフェイトまだ4個しか集まってなくて。おっとそうだボルグレイン青いジュエルシードを1個プットアウトしてくれ。」

「PUT OUT」

「フェイトこの青いのはフェイトが持つといた方が良い。俺は赤いだけをボルグレインに貯め込んでいくから。」

「良いの？由生。私と会う前に回収したやつでしょ？由生が。赤い奴は確かに由生が持つてるって事で私も同意したけど本当に貰って良いの？」

「ああ貰ってくれフェイト。その代わりフェイトがもし赤いのを回収したら俺が貰うって事で良いか？対価は。」

「赤いのって言ったら前に住まいで契約した時に由生とフェイトが回収してきた青い1個と赤い1個以外で住まいの近くで発動前の赤いのを1個見つけて封印したのをフェイトに渡した事あったよね？。あれと交換したら？フェイト。」

「あつ！あれだよねアルフ。バルディツシユ赤いのだけプットアウト。由生のと交換でこれだけ貰ってくれないかな？由生。」

「これでこっちの手持ちは青いの4個に赤いの3個か。アルフグツジョブだぜ。ボル

グレインプットイン。」

「PUT IN」

「バルディツシユこつちもプットイン。」

「PUT IN」

「さて、それじゃああとにはなのは達に任せるとして俺はなのはに念話送っておくぜ。」
「なのはちよつといいか来てもらつて。すぐ近くでお前らの試合見てるからすぐわかる。」

「ほえ？ 由生君どこ？ つて隣にいるのフェイトちゃんとのあの時のお姉さん。アリサちゃん達に連絡してから行くね。」

SIDEなのは

「アリサちゃん、すずかちゃんちよつとユーノ君お願い。なのはは由生君とお話ししてくる。」

「あつちよつとなのは！ 行つちやつたわね。近くに由生がいるみたいだけどどこだろう？。」

「それで由生君話つて何？。大事な事なんだよね？。」

「お前らのチームのゴールキーパーの男の子ジュエルシードを1個持つてるぜ多分見に来てる彼女っぽい女の子にプレゼントするつもりだろうな。あの女の子の方を自然

と気にしてたからな。なのは達の方で封印しておいてくれ。今回は俺達は身を引く。気づかれずに回収するのは難しいしな。」

「そんなあのキーパーの子が持つてるの？ ジュエルシードを。でもどうしてそんな事に。」

「多分綺麗な宝石だなあゝって事で拾ったんだろうなあの子。願い事に反応してからじゃ遅いからなのは達で何とかして回収してくれ。じゃあ俺達はこれで失礼する。アリサやさすがに気づかれたくないしな。」

「わかった由生君。そう言う事ならなんとか回収してみるね失敗しちゃったらごめん。その時は手助けに来てくれる？ 由生君。」

「手助けは無理だな。これからフェイトと訓練するからな2人でシミュレーター使つて。腕上げておかないと赤いのは戦えないしな。」

「そつか由生君赤いの回収してたもんね確か。赤いの今何個くらいなの？ 残りは。」

「残りはあと5個くらいだな。それで赤いのは封印が終わる。青いのは現在6個だからあと15個か。青いのが大変だが頑張ろうなのは。」

「赤いのがあと5個くらいって事はまだ2個くらいしか封印出来てないのなの。あと15個大変だけど頑張る。じゃあまたね由生君。」

「お待たせアリサちゃん、すずかちゃん。キーパーの子つてどこ行つたの？。」

「キーパーの子ならあそこにいるけどどうしたの？なのはちゃん。説明してくれるよね？。」

「それがねあのキーパーの子ジュエルシード持つてるって由生君が。だから私達で回収しなくちゃなの。」

「はああああああああそれがマジならヤバイじゃないのなのは。何としても回収するわよなのは、すずか。」

「どこで拾ったのかわからないの？なのはちゃん。由生君から何か聞いてないの？。」
「由生君からは何も聞いてないなの。ただあの子がジュエルシードを持つてるって事だけで……………」

「はあああああああしやうがないわねなのは。すずかポケット以外を1回凍らせられる？その際に取ってくるからあたしが。」

「無理だよアリサちゃん。凍結範囲は空気中の人物含めて全部だから。ごめんね役に立てなくて。」

「ああもうどうしたらいいのよこの場合。」

「アリサちゃん隙を見て抜き取るしかないよなの。」

そんなこんなで翠屋での祝勝会が終わり解散となっていました。

「結局隙なんかなかったわねなのは、すずか。」

「仕方ないなの。こうなったら事情を説明して。」

【それは駄目だよなのは。魔法文化がない以上秘匿しとかないと。】

【ごめんユーノ君。じゃあどうしたらいいの？。】

【発動するまで待つしかないねもう。】

そしてジュエルシードが発動して

「今回のつて大きな樹なの。どこかにあの子どもがいるから助けないとなの。」

【あの子ども達の居場所は見つけたけどこれだけ大きいとかなり近づかないと封印できないよなの。】

いよなの。】

【大丈夫なの。私は砲撃の才能があるってユーノ君言ってたのそれを試してみるの。】

【気を付けてねなのは。なのはが怪我でもしたら僕は。】

【大丈夫なのユーノ君。】「レイジングハート大きいので1発封印出来るよね。」

【オフコースマスター。あなたがそれを望むのなら。】

【お願いねレイジングハート。】

【デイベイン。】

【マスター。】

【グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。】

【凄いいんな大型を1発封印してしまうなんて。なのはの魔力はどれだけ高いんだ。】

「ユーノ君お疲れ様くなのははちよっとお疲れモードなの。だから夕飯までお休み
し。」

「ゆっくり眠ると良いよなのはお休み。しかし、なのはの魔力は日々強くなってきて
いる。」

残りジュエルシード青14個、赤4個で次回へ続く

風の向こうの記憶なの前編

SIDEフェイト

「ねえ由生聞いて欲しいの。これはまだ私の母さんが研究に没頭していた私が幼かった頃の事なんだけど、私と母さんが暮らす移動庭園はミッドチルダの山深い土地に停泊していたんだけど、その頃の私は1人きりで庭や山の中で戦闘訓練や魔法の練習していたんだ。その生活が寂しくなかったと言えば嘘になるけど、まだ暖かい思い出もいっぱいあったんだ。」

「おはようフェイト朝ですよ。」

「おはようリニス。」

「食事の用意ができてます、体調はどうですか?。」

「うん悪くないよりニス。」

「今日は外も暖かいので食事は外で取りましようかフェイト。」

「うん。母さんは今日も研究室?。」

「ええそうですよフェイト。」

「ミッドの中央で次元航行エネルギーの技術開発に携わっていた母さん。偶然の事故

がきかっけで仕事を離れる事になり、それからはどこにも属さずに放浪の旅をしながら2年?、3年?ともかく優しかった母さんは変わってしまった。全然笑わなくなって研究以外には見向きもしなくなってたった1人の娘である私とも全然話をしなくなってしまった。」

「フェイト、プレシアも今は研究で忙しいけど、今取り掛かっているものが仕上がればきつと。」

「うんわかってるよ。」

「研究だつてプレシアとあなたの2人が幸せになるためのものです。だから今は寂しいかもしれないけど……。」

「うんわかっているつて大丈夫私母さんが好きだもの。忙しくて私と遊んだり、魔法を教えたりできないからつてリニスを作ったのもわかってる。」

「その通り、使い魔特に私みたいに高度な知性とハイレベルな魔力を兼ね備えたものを作成して維持していくのは術者にとつても大変なものなんです。その気持ちを汲んであげなくてははいけませんよ。」

「うん。うふっさつきのはちよつとした自慢?高度な知性とハイレベルな魔力つて。」

「失礼な! 厳然たる事実です。」

「うふっ。」

「うふっ。さっ食べたたら片付けを手伝ってくださいね。一休みしたら部屋で魔法のお勉強です。」

「はい。」

「じゃあ次高速詠唱の際の法人制御方程式の変化について。」

「あつそれ先週自分でやっちゃった。」

「はい？」

「それってこういう事だよな？圧縮した詠唱文に対して生成する魔法陣の式をこうやってこうそして最後に一括でコード変換合ってる？」

「詠唱破棄の時のエンコード方法は？」

「んつとね対応表の書き取りをしてほしい覚えただけどほらっ？」

「あら？困りました今週の予定が粉々です。」

「あつ！ごめん。」

「謝る所じやありません胸をはってえへん！と。」

「えへんっ！」

「うふっ大した者ですが、全部お一人で？」

「うん。書庫で調べたの。」

「勉強熱心なのは良いですが大丈夫ですか？ちゃんと眠ってますか？」

「平気勉強楽しいよ?。」

「うふっ。プレシアにはちゃんと報告しておきますよフェイトがとても頑張ってるって。」

「あつ! あんまり大きさに言わないでねがっかりさせたくないから。」

「はい! 的確かつ正確に厳然たる真実のみを伝えますよ。さて、今日は何をしましょうね?。」

「あつ方式接続についてちよつとわからない処があるんだ。」

「じゃあ今日はそれを。早く済んだら外で模擬戦でもして過ごしましょうか?。」

「コンコン。プレシアリニスです。起きてますよね? 入りますよ。」

「リニス何の用?。」

「報告ですよフェイトについての。」

「今忙しいわまたにして。」

「駄目です今月はまだ1度も聞いてもらってないですから。」

「好きにしなさい。」

「します。フェイトの成長は相変わらず順調を通り越して怖いくらいです。あの歳でもう初級魔法の殆どは呪文すら必要としないレベルですし、上級魔法もサポート用のデバイスを持たせれば一通りこなします。魔法戦闘についても中距離戦を中心に思い切

りのいい戦闘をします。この辺りについて報告したことは覚えてもらってます?。」

「リニス馬鹿にしてるの?。」

「疑問点についての質問です。問題ないなら聞き流して。電気系の魔法は特に覚えが速くあなたの資質を受け継いでいる事もあるのでしようが、認めてもらいたい、褒めてもらいたいという気持ちが強いんだと思います。」

「あの娘こがあなたにそんな事を?。」

「まさか! そんな子供らしい我儘あの娘こは口にしませんよ。それが良い事か悪い事かわかりませんけどね。」

「前から言おうと思っていたのだけどあなたは本当に生意気だわ。」

「心外ですね。改める気はありませんが。」

「もういいわ報告は聞いたから。研究の邪魔よ出て行つて。」

「はいではまた。ああそれから今フェイトに合わせた杖を作っています。いくつか材料が足りないのでまた訓練で集めたいと思ってますが?。」

「好きになさい。」

「はい。」

「リニスいつ頃仕上がりそうなの?。」

「はい?。」

「フェイトの杖ですか？まだ設計段階ですからなんとも。」

「違うわあの娘自身の事よ。」

「今7歳ですから女性としての機能成熟まではあと7〜8年くらいといった所ですか？魔導士としてはあと3年くらいですかね。」

「かかりすぎだわ1年で仕上げて。」

「無理ですよそんなの。」

「当面あの娘に魔導の全てを教える必要はないわ。実戦で使える高速魔法だけを一通り扱えればいい。これを伝えるのは初めてじゃないはずよ。」

「聞いてましたけどね。基礎や構造から教えないといざという時に使い物に。」

「リニス。」

「うっ！杖の設計を考え直します。思考型にすればシンパレート次第ですが、少しは実戦レベルになるのが早まります。ただ予算はかかりますよ覚悟を。」

「たかが杖1本いくらでも使いなさい。」

「他には何か？」

「ないわ。」

「じゃあこれで失礼します。食事。」

「ん？」

「食事と睡眠はしっかりと取ってくださいねプレシア。」

「行きなさい研究の邪魔よ。」

「おやすみなさいプレシア。」

「我が主人ながら本当にもうったく。また憂鬱を加速させる雨です。ねイライライライラ。と苛立つても無意味なのはわかっているんですが。さて、フェイトも寝る時間です。し夜更かししないように本でも読んであげますか。」

「わおおおおおおおん。」

「犬？ いやオオカミですか。フェイト本を読んであげましょう。フェイト？ いないんですか？ 念話で呼んでみますか。【フェイト】

【あつりニスごめんなさい今外なの。】

【外この雨の中いつたい何を】

【遠くで犬の声がして、狼がいたんだけどなんだか様子がおかしくてそれで。くうんくうん】

【待つて念話じやどうも容量を得ません今行きますからそのままそこに】

「フェイト。」

「リニスごめんなさい。くうんくうん。」

「ああ狼の子供ですね。額に宝石がついてるこの辺り特有の種類です。」

「なんだか様子が変わなの。近くに群れの狼がいるのに弱ってるこの狼をほったらかしで。」

「本当だ近くに何頭かいますね。とにかくこの雨では風邪を引きます屋敷の中に。」

「あのこの狼は。」

「うん。連れてきてください。」

「うん。」

「わかりましたよこの狼病気なんです。」

「病気？くうんくうん」

「感染性のあるこの病気が群れに広まるのを防ぐ為発病した個体は群れを追われるんです。群れの中の何頭かが監視して群れに戻らないようにしたりもするらしく」

「あつ。」

「幸い他の動物には移らないみたいです。念の為に消毒をフェイト。」

「リニスこの狼助けられない?。」

「その病気は原因不明の死病で治療法は見つかってないです。えっと発病から死亡まで早ければ一昼夜。」

「あつ!。くうんくうん。」

「フェイト残念だけど。」

「この狼私を呼んだんだ。最初はきつと誰でもいいから助けてって。だけど声にひかれてやってきた私を見つけて私の目を見て助けてって。」

「動物と接する機会をあまり作らなかつたのは失敗でしたか。初めて自分を頼つてきた動物という事件で感情が理性を超えてしまっている。」

「リニス。」

「使い魔の生成呪法を使えば仮初の命とは言え肉体の命は維持できるけどフェイトが使い魔を持つにはまだ早すぎるし。私が使い魔じゃなくて普通の魔導士なら。」

「この狼私の使い魔にしちゃ駄目かな?。」

「あつ。」

「早く一人前になりたくて使い魔の作り方こつそり勉強してたの。」

「じゃあ知つてると思うけど使い魔を作るというのは簡単じゃないんですよ。使い魔の命を維持するために術者の魔力を常に与え続けなければならぬ。用が済んだら解呪するのが普通の使い方。」

「じゃありニスは?。」

「私の場合レアケースです。それに私だつてああいえなんでも。とにかく軽い気持ちで手を出していいものじゃないんですよ。」

「軽い気持ちなんかじゃない助けてって言ったんだ私に。だから私が。」

「ああそうかあの子狼はフェイトにとつては今の自分自身なんですネ。孤独の中で親とはぐれて助けを求める無力な子供。良いですか？フェイト使い魔の生成と言うのは死亡の直前か直後に人造魂魄を動物の肉体に宿らせるものです。だから実際には命を助ける訳でも蘇らせる訳でもない。分かりますね？失った命を取り戻す魔法なんてどこを探してもないんですから。」

「だけど使い魔の呪法で生まれた命も生前の記憶を少しなら残るつて。」

「正解ですフェイト。でもいいですか？フェイトいくつか覚悟を。使い魔を持つつて事はたとえひと時でも1つの心と命と運命を共にするという事です。契約で縛り付けない限り使い魔にしたからつて服従させられる訳じゃない。最悪契約の解呪という事で自らその命を奪う事になりますよ良いですね。」

「うんわかつてるよりニス。それでも助けてつて事なんだから私が。」

「では支度を。契約の内容は。」

「それはあとで今は仮契約つて事で。待つてねすぐに助けてあげるからくうんくうん」

「我が求むは契約の証印を。契約の元新たな命と魂を。魔力が吸われる。」

「それが命の重さですフェイト。やめるなら今ですよ。」

「嫌だ魔力は私がつと強くなればいい。だから新たな命をここに。」

「はあはあはあ。」

「成功です早くも懐いてますね。ほら抱いてあげてください。」

「うん。くうんくうんくうん。あったかい柔らかい。」

「それが命の温度です。」

「うふっうふっくすぐつたい。」

「このことはまだプレシアには秘密にしておきましょう。もう少し状態が落ち着いてからでないと心配させてしまいますから。」

「うんありがとうリニス。」

「このことがプラスに働くと良いんですけど、フェイトにもプレシアにも。」

「それから小さな狼は私の使い魔になった。」

「さて、食事ですよっと。」

「こんなに。」

「あなたの食が細いのは承知してますが魔力UPの為の栄養取ってもらわないと。」

「アルフほら待って。」

「ああ名前つけたんですね。」

「うんアルフって言うの。ほらアルフご飯。」

「私の魔力の増加に合わせてそれも気にならなくなってアルフも人間形態に変身でき

るようになって。」

「あくフェ・イ・ト。フェイト。」

「アルフフェイトご飯ですよ。」

「はい。」

「ご飯。食べたらまた森に行つてかけっこしようフェイト。」

「駄目よアルフフェイトはお勉強です。」

「むううう。」

「勉強が終わつたら一緒に遊ぼうね。」

「うん。」

「戦闘訓練ならアルフも役に立つんですけどね。」

「アルフ役に立つ。」

「元が狼だもんね。」

「狼。」

「はあ上手く行かないわ。リニス、リニスお茶を入れて頂戴。」

「はいすぐに。フェイトアルフ食べたらお片づけを私はご用事がありますので。」

「ねえフェイトリニス時々ご用事ってどこか行くけどどこ行つてるの?。」

「あつ多分母さんの所だよ。」

「お母さん？。フェイトにもお母さんいたんだ。」

「いたんだよ。」

「でもこの間読んだ本だとお母さんって子供の傍にいていつも守ってあげるんだって。フェイトのお母さんいつもフェイトの傍にいないけどなんで？。」

「それは私ともう子供じゃないよアルフ。」

「そうなの？でもフェイト背小さいし胸だってぺったんこだしまだ子供だと思うんだけど？。」

「私よりちびっ子に言われたくないな。」

「にやはははははアルフは狼だからすぐ大きくなるんだって。」

「うんそっか。確かにこの二か月くらいで随分大きくなったよね。すぐに私より大きくなっちゃうのかな？。」

「うん早く大きくなってしたらフェイトを守ってあげる。」

「うん楽しみにしてる。それまではいつもアルフの傍にいるからね。」

「アルフに命をくれたのはフェイトでいつも傍にいるのもフェイトでフェイトはアルフのお母さん？。」

「違うよ！でもそれでもいいよ。」

「うーんよくわからない。でもどっちでもいいフェイトと一緒にいられるなら。」

「プレシアお茶ですよ。」

「ゴホツゴホツ。」

「あんまり調子よくないみたいですね。」

「どうつてことないわ。ちよつと根を詰めすぎただけ。」

「いやあんまり良くないですね気を付けてください。」

「あの娘が犬と一緒にいるのを見たわ。」

「ああ拾つてきたんですよ先月。死にかけてたのを可哀そうに思つて使い魔に。今は仮契約期間です。」

「あなたが許可したの。」

「はい！。たいそう思い入れていたので見殺しにさせたら今後に影響が出るかと。」

「あの娘の魔力はまだ未発達使い魔なんて持つべきじゃないわ解除させなさい。」

「嫌です。フェイトはあの狼こといるとよく笑います。自分を頼ってくる相手を可愛くもあり、自分が得られない愛情をせめて自分の使い魔には与えてあげたいというのもあるんでしょう。なにより聞き分けの良いフェイトが自分の意思を強く私に見せました。その意思を尊重したいと思います。」

「私の命令が聞けない？あなたはいつたい誰の使い魔だったかしら？」

「あなたのですよプレシア・テスタロッサ。ですが私が命じられたのはあなたの娘

フェイトを一流に育て上げる事。大局的な視点でその命令を実行しています。あの娘とのアルフとの出会いやふれあいが必要フェイトの力になるとそれがいつかはあなたとプレシア2人の為になると思っっているから。」

「はあああああ」

「プレシア」

「お茶が冷めてしまったわ入れ直して。」

「プレシアが何の研究をしているのか私は知らないし、私が作られる前のプレシアとフェイトの事も私は知らない。フェイトの話では昔は仲が良くてプレシアはとても優しい親子だったそうだけど、一般的知識に照らし合わせてもプレシアとフェイトの親子関係は少し悲しすぎる。一緒に食事する事はないし顔も数か月に一度あるかないか。んっ？アルフ」

「あつりニスご用事は終わったの？。」

「ええつつった今ね。1人でお出かけ？。」

「うんフェイトがお勉強中だから庭とか倉庫とか。」

「そう奥の方には行かないようにねプレシアに見つかつたら叱られます。お茶の時間には戻るんですよ。」

「うん。」

「はあ公式よし、あとは状況に合わせてこの数式を。」

「お待たせしました。ごめんなさい。」

「ううん自習してたから。」

「そうどの辺りを?。」

「えっとね高速術式の展開方式関連この辺。」

「ああもうそんな所まで進んでたんですね偉いですよ。」

「えへへ。」

「ああプレシアが褒めてましたよ。フェイトがちゃんと勉強していて偉いと。」

「あつ本当。」

「フェイトには内緒にって言われましたけどね。この分なら来年くらいにはもう一人前の魔導士になってるんじゃないかと。」

「来年かううん頑張る。」

「はい。」

「時折私の胸を襲う切ないようなこの感情はフェイトへの同情なのでしょうか? そうでなければ私が知らずおそらくは知らないまま消滅していく親としての感情なのでしょうか?。時々考えてしまいます。まあ考えたところで肩が凝るばかりなのが。」

「リニス何か言った?。」

「ああごめんなさい只の独り言ですよ少々肩が凝ったなど。」

「じゃあもんであげるよどの辺。」

「いいですよ本当に。」

「ほらどの辺本当に。」

「あゝフェイトとリニス遊んでる。ずるい。」

「アルフ。」

「遊んでるんじゃないやありません。ちよつと休憩してるだけです。」

「アルフもやるうりやく。」

「アルフあなたたつて子はく。」

「あく尻尾引つ張つちややく。」

「いきなり飛び掛かつちやびつくりするでしょ。」

「だけど一つだけ。」

「さあお風呂ですよ2人ともお風呂場へ。」

「それにしてもフェイトはあんなに魔法が出来るのに1人で頭が洗えないとは。」

「違うよ洗えるんだよ。目を開けられないだけで。」

「今のひと時が私の全てであるだけで。厳然たる事実であるために叙情的な意味で

も。」

「さあ明日に備えてお休みなさいです。今日はどうしますか？本を読みますか？」

「あれが良いないっただか歌ってくれた歌。」

「歌ですか？あんまりうまくないですよ。それでもよろしければ。」

「歌ってリニス。」

「長いからここまでで一区切りとするけどここまで聞いた由生の感想は？。」

「フェイトお前結構壮絶な人生経験してるんだな。アルフとの出会いがそんな事とは知らなかったよ。リニスとのその後はどうしたのかまた聞かせてもらえるかな？。」

「うん良いよ由生。じゃあ今日もジュエルシード探索に張り切っていこうか。」

「わかったフェイト。じゃあまた今度聞かせてくれよフェイト。」

そして時間は過ぎていく

風の向こうの記憶なの後編

SIDEフェイト

「それから1月程たったある日の事アルフとの仮契約期間が終わろうとしていた。」

「ん、魔力の総量も順調に増えているし問題なさそうですね。」

「うん。もうアルフを維持してるって感覚は殆どないかな。」

「そろそろ本契約ですね。契約の内容を決めなくてはですねフェイト。」

「そうだねリニス。」

「雨降ってきましたね今夜は嵐になりそうです。」

「ふーんふんふーんふんあつなんかドアが開いてる。ここは今まで入った事のない場所。あつ入るとフェイトのお母さんに叱られるって言ってたっけ。でも見つかつたらごめんさいすればいいか。では探検開始。」

「あと少し、あと少しなのに最後の1押しが足りない。方法はあるはずなのよそこに至る理論だってある。」

「あれがフェイトのお母さん。」

「誰?。」

「あつ。あ・あのこんにちわフェイトのお母さん。あたしフェイトの使い魔のアルフだよ初めましてでよろしく。」

「はあああああふん。」

「きやあ何するのよいきなり。」

「反応は悪くないみたいねこれじゃあ狼と言うより猿ね。」

「アルフ狼。猿違う。」

「使い魔にするなら素材を選ばないといけないのにこれじゃありニスの失策ね。フェイトの出来も知れたものね。」

「リニスは良い奴だし、フェイトは凄いいんだぞ。魔法だって凄いいろんな事知ってるし。夜は一緒に寝てくれるし。」

「使い魔をペットと混同してるのかしら？あなた使い魔の使命を知っているのかしら？。」

「うっ！使命……。」

「アルフ、アルフ。」

「フェイトどうしました？。」

「あつりニス。アルフがいらないんだ。念話にも出なくて困っちゃって。」

「あつ【そう言えばさつき奥の間のドアが。】まさか。」

【プレシア。】

【リニスあなたからの念話は非常時以外は禁じてたはずよ。】

【アルフにフェイトの使い魔に会いましたか?。】

【さあ?。】

【まさか契約解除を。】

【第三者による強制解除や使い魔の破壊は契約者であるフェイトにもダメージが行くわ。私がそんな事すると思つて?。】

【アルフには会つてないんですね。】

【今手が離せないの。切るよ。】

【多分外です。今探索しますから。】

【アルフ、アルフ。】

【フェイトあそこ。】

【アルフ良かった心配したんだよ。】

【来ないで。】

【アルフ?。】

「使い魔つて主人が目的の為だけに作り出すんだつて本当?。維持するのが凄く大変だから目的に合わせて作つて、目的が終わったら消しちゃうつて本当?。」

「なんで？なんで急にそんな事。」

「多分書庫です。あなたに見せようと使い魔関連の本を出しておいたので。すみません。」

「フェイトも自分の目的が済んだらあたしを捨てる？あたしの事消しちゃうの？そんなのヤダ。フェイトに捨てられるのも消えちゃうのもそんなのヤダ。」

「捨てないよ。捨てたり消したりなんかしないよ。」

「でもあたしフェイトの使い魔だ。友達だって姉妹みたいだって思ってたのに。」

「友達や姉妹じゃないとダメかな？使い魔と主人って関係かもしれないけどあたしは楽しかった嬉しかった。大きくなったら守ってくれと言ってくれてすごく嬉しかった。」

「でも。」

「契約の内容考えたの、聞いてくれる？」

「うん。」

「汝使い魔アルフ。主フェイトとの契約の元以下の契約を遵守し移行せよ。その四肢と心を持って自らが望む満足できる生き方を探し、それを行え。いかな地にあつても主と遠く離れても命が尽きるまでその制約を胸に。」

「ああ。」

「私がアルフを使い魔にしたのはアルフに死んで欲しくなかったから。だからこの先に別に私と離れてもどこに行つても良い。自由な狼を縛る鎖を私は持たないし使わないよ。だけど、今までみたいに私の傍にいろいろな事をしてくれるなら私は嬉しい。アルフと一緒にだといろんな事が楽しくて嬉しくて心強いから。」

「えぐつえぐつえぐつ。」

「私とアルフは友達でも姉妹でもないけどだけどきつとね最高のパートナーになれると思うんだ。」

「最高の。」

「うん。最高の。ああほら自慢の毛並みがぐしよ濡れだ。帰ろう。」

「フェイト〜。」

「使い魔も主人も関係ないよ今までもこれからもずっと2人で一緒にいようこれからずっと。」

「うわああああああん。うわああああああん。」

「そんな出来事があつて、私とアルフは契約を結んだ。私が願った制約はそのまま、アルフが誓った制約は。」

「我使い魔アルフ。狼の血と誇りにかけてフェイトの心と身体を守りその身に訪れる災厄をこの手で振り払う事を誓う。」

「使い魔アルフ。」

「主フエイト。」

「今ここに契約を。」

「おめでどう契約成立ですね。」

「感覚的には特に何も変わらないかな?。」

「うん。」

「いろいろ変わってるんですよ。精神リンクの強化とか魔法資質の受け渡しとか。」

「勉強すればある程度は私と同じ魔法が使えるようになるんだよ。」

「それはカツコいい勉強する。」

「明日から生徒が2人ですね。ビシビシ行きましょう。」

「その後冬が深まる頃にはアルフの手足も随分伸びて。」

「うおおおおおおおおおおおてえりやああああああああああ。」

「凄い。」

「見たか必殺パンチ。」

「こ・この馬鹿力パンチでバリアを砕くとは。」

「鉄拳無敵。」

「アルフは魔力を固めたり圧縮したりするのがうまいんだね。」

「身体能力も高いですし、結界系を上手く身に付けて行けばフェイトのサポートとしてはまずまずです。」

「まずまずじゃ駄目。超スゴにならなくちゃフェイトを守れない。」

「うふふ。」

雪が解ける頃にはもうすっかり大人の姿になってリニスの背を追い越して

「全く身体ばかり大きくなって。」

「ご飯おかわり。」

私達は順調に魔導士として成長していった

「これがフェイトの新しい杖。まだ製作中ですけどね。」

「へえええええええ。」

「なんかこれは斧なの？ちよつと不細工じゃない？」

「GET SET。」

「ああ。」

「喋った。」

「喋りますよインテリジェントデバイスですから。フェイトが今学んでいる最終試験を習得する頃には完成しているはずですよ。」

「そっか私の杖か。」

そして夏が終わる頃

「アルカス・クルタス・レイギアス降り来りて眼下の敵を討て。」

「うわあ凄い魔力。」

「アルフ耳を塞いで轟音が来ますよ。」

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル突き立て雷光の剣サンダーレイジ。」

「うわあ。」

「ああ。」

「はあはあはあはありニス成功?。」

「うん狙いも正確ロツクオン精度も問題なし。良いでしょう最終課題クリアです。」

「やったああああああああああ。」

「やったあ。ああ」

「フェイト大丈夫?。」

「ありがとうアルフちよつと気が抜けた。」

「魔力も使い果たしてますね。アルフフェイトを部屋に。」

「うん。」

「フェイトおめでとうよく頑張りました。」

「ありがとうリニスのおかげだよ。これからも宜しくね。」

「これからか……」。

「プレシアリスです。」

「入りなさい。」

「聞こえてましたかさっきの轟音。」

「雷撃系の高位魔法ね。あれはフェイトが?。」

「杖も使わず身体一つでね。」

「そう素晴らしいわ。」

「これでもう私がフェイトに教えられる事はなくなっていました。杖も今夜には完成ですし私の仕事は終わりですかね。」

「そうね終わりね。杖を完成させたらさっさと消えなさい。あなた程の高性能な使い魔維持も楽じゃないのよ。」

「そうします。でもその前にプレシア私との契約の履行もしくは制約覚えてますか? 契約を履行したらご褒美をくれるって。」

「ああ元の山猫に戻って山にでも帰る?。」

「今更動物に戻ってもねえ。」

「人型のままが良いの? でもそれじゃあ契約に。」

「反しますものね。大丈夫もつとずつと簡単な事ですよ。」

「ああ。」

「フェイト大丈夫?。」

「凄く疲れてるけどなんだかいいい気分。」

「うんあたしも嬉しい。流石あたしのご主人様だ。」

「ありがとうアルフ。」

「フェイト、アルフ晩御飯の時間ですよ。」

「あつはい。」

「今日はちよつとビツクリな趣向があります。フェイトは可愛い服を着て髪とリボンをしつかり整えてそれから食堂に向かいましたよ。」

「フェイト久しぶりね。」

「母さん。」

「リニスに聞いたわ課題を全てクリアしたって。」

「は・はい。」

「今日はそのお祝い一緒に食事をしましょう。」

「あつはい。」

「はあくあの人も母親らしい所あるんだね。」

「親子ですからね邪魔しちや駄目ですよアルフ。」

「当たり前だよするもんか。」

「最後の高位魔法習得までどれくらいかかったの?。」

「えっと中級の術式接続で戸惑っちゃって、でもそれがわかったらあととはすぐに。」

「好きな魔法は?。」

「えっとランサーとか射撃系は割と得意かもです。」

「そう。」

「なんか親子っぽくないなあ。」

「一緒の食事なんて私が生まれてから初めてですしね。」

「まああの人の事はどうでもいいけどフェイトが嬉しそうだからあたしは嬉しいや。」

「さて、アルフ私は今夜から少々遠出をしないとイケません。」

「あれっそうなの?。」

「フェイトにもあなたにももう教えられる事もないですしね。」

「うーん?。」

「あなたがいればフェイトはもう大丈夫ですから。」

「あっそうかな?。」

「そうです。自信をもって。」

「ああそれからあとでフェイトに私の部屋に来るように伝えて。私からの贈り物があ

るからと。」

「うん。」

「それじゃあ。」

「行つてらっしゃい。」

「気を付けて。」

「さて、私は私のなすべきことを全て終えました。気がかりや心残りも山ほどありますが、役目は終わってしまったのですから素直に舞台から降りましょう。フェイトの杖、私は消えてしまうけど思いと意思はこの杖に残して。バルディツシュ闇を貫く雷神の槍夜を切り裂く戦陣の戦斧私の願いを込めた杖。」

「ねえプレシア私実はあなたに嫉妬してたんですよ。フェイトが私の子供だったらよかったです。そしたらこの手で抱きしめてうんと可愛がれたんです。だけど、プレシアの使い魔でなかったらフェイトにアルフに出会っていなかったら。だから嫉妬より感謝の方がちよつとだけ多い。お休みなさい可愛いアルフ愛しいフェイトさよなら私の意地悪で偏屈でちつとも優しくないご主人様。バルディツシュあの娘達を宜しくね。」

「リニスもういつてしまったの？リニス。あの娘の杖もう完成していたのね。こんなはずじゃなかったのかしら。」

「そうなの?。」

「うんリニスからの贈り物だつて。」

「あつ母さんごめんなさい。」

「あつ杖。」

「来なさいフェイト。」

「は・はい。」

「あなたの杖よ。リニスが残したの。」

「はい。」

「手に取つて。」

「重いけど暖かい。」

「GET SET。」

「この杖こゝ私に合わせてくれる。」

「リニスが作ったものだもの。」

「はい。バルディッシュそれがあなたの名前。」

「デバイスフォームセットアップ。」

「うん。宜しくねバルディッシュ。」

「良い事フェイトその杖でもっと強くなってあらゆる望みをかなえる力をその手に宿

しなさい。あなたはこの私の娘なのだから」

「はい頑張ります。」

「杖の扱いを覚えたら時々お使いに行ってもらうわ良いわねフェイト。」

「はい。」

「リニスもう行っちゃったのかいつ帰ってくるんだろう?。」

それから私はバルディッシュの扱いを覚えて、時々母さんの手伝いに行くようになった。ある時は実験の材料、ある時は書物や文献。時が過ぎる毎に、実験と研究が行き詰まる毎に母さんはいら立ちや怒りを隠さなくなるようになって。リニスがいた時より私達の家は暗くなっていた

「なんだよもう。言われた通りの本を探してきたのに。」

「仕方ないよ母さんが知りたい事が載ってなかったんだから。」

「だからって叩く事ないじゃないか。フェイト痛くない?。」

「うん平気そんなに強く叩かれてないもの。」

「嘘だ傷になってるよ。ああもうリニスがいればなくあのおばばの事叱ってくれるのに。」

「アルフ汚い言葉を使わないで。」

「へええええええええええええ。」

リニスは半年たつても1年たつても戻ることではなく、私とアルフは何となくあの日何
が起きていたのか、どうしてリニスがいなくなつたのかわかつたけど。それを口に出す
ことはなかつた。庭園は移動をはじめ家の空気はもつと重くなつて、アルフも私には
ずつと優しくなつたけど少しイライラしてる事の方が多くなつた。私は少し背が伸びて
少し背中や手足に傷が増えて

「絶対、絶対おかしいよあんたの母さん。フェイトの事こんなに傷だらけにして、フェ
イトこんなに頑張つてるのに。」

アルフは何度か私に家を出る事を進めたけどその度に母さんは少し疲れて苛立つて
るだけだからって私はアルフを宥めてそして

「フェイト急ぎの用事があるの探しものよ。」

「はい。」

「ロストロギア形態は青と赤の宝石一般呼称はジュエルシード。」

「ジュエルシード。」

「全部で28個少しでも早く1個でも多く手に入れてきて頂戴。」

「私とアルフはジュエルシード探索の旅に出た。」

「これが私とアルフがこの世界に来た理由だよ由生。」

「フェイト結構すさまじい人生送ってるな。その後リニスは戻ってこなかつたか。も

しかしたら時の庭園の1部屋でそのまま消えないで倒れているのかもしれないなりニスは。プレシアからの魔力供給も止められてるみたいだしな話を聞く限りじゃ見つけた発動前の青いジュエルシードだフエイト。封印処理してバルディツシュに。」

「うんそうだね。バルディツシュ出来るよね。」

「YES SIR。」

「うん良い子だバルディツシュ。それじゃあ宜しくね。この辺りにあるのはこれ1個だけみたいだね。あとは今の所場所が分からない。」

そして時間は過ぎていく

ジュエルシードの自然の驚異なの

SIDEフェイト

「この前のフェイトの過去には驚いたぜフェイト。師匠であるリニスとの別れやアルフと一緒にこの世界に来た時の事情やら知ったからにはもっと協力していくぜ俺はな。」

「ありがとう由生。今日は訓練？それともジュエルシードの探索？どっちで来たの由生。」

「ジュエルシードの探索だな。まだ半分以上散らばったままだしな少しでもフェイトの方にジュエルシード集めないとな。」

「じゃあ行くかうか？由生。ジュエルシード見つかるといいね（笑顔）。」

「お・おう（照れ）。」

「どうしたの？由生顔が赤いよ？風邪でも引いた？休んでく？由生。」

「フェイトの笑顔があまりにも可愛かったからなつい……。その笑顔はあんまり見せないでくれ他の人には。俺なら別に可愛いから良いけどな（ボソツ）。」

「えっ？可愛いつて私が。そんな事言われると照れるよ由生。まあ可愛いつて言われ

て嬉しくならない娘はいないからね嘘でも嬉しいよ由生。」

「嘘じゃないさフェイト。フェイトは俺の中では誰よりも可愛いさもちろんフェイトが俺を好きならただけどなこれは。俺はフェイトの事はLIKEよりもLOVEだけだなフェイト。」

「LOVEってそれって本当？由生。私由生の事使い魔として欲しくなっちゃったなあ〜ってのは冗談だけど由生の事欲しいなあ〜。」

「ああ本当さフェイト。俺は世界中の誰よりもフェイトの事が好きです。フェイトの為なら俺が剣であり盾になっても良いと思ってる。」

「返事は今回の件が片付いてからでもいい？由生。今はまだ協力者って事で一緒にいたいんだ私。」

「ああ構わないぜフェイト。おっとそろそろ反応が出てきそうな区域だなフェイト。ジュエルシードの反応探そうぜ。」

「本当だねそろそろ魔力反応ありそうだし別れて探そう由生。今日は楽な相手だといね由生。」

SIDE 由生

「どこにあるんだ？ジュエルシード。ってなんだこの地面を流れる砂は？。砂？まさか……………」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「出たな。【フェイト俺の方でジユエルシードの暴走体と遭遇したすぐこっちに来てくれ。】」

SIDEフェイト

「わかった。それで今回の暴走体は？。」

「砂だ。砂を使うモンスターハプルボツカだ。弱点属性はフェイトが第1位で俺が次点だなフェイト。」

「すぐ行くよ由生。それまで何とか持ちこたえて。」
そして2人は合流して

「由生ハプルボツカが2頭いるように見えるんだけど？。しかも1頭は色違いだし」

「これは1頭青で1頭赤だな間違いなく。」

「じゃあさっさと片付けようか邪魔が来るといけないし。」

「ああなのは達が来る前に片付けてしまおうかフェイト。」

「ランサーセット。」

「シューターセット。」

「ファイア。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

SIDEなのは

「見つけたよアリサちゃん、すずかちゃん。ジュエルシードのモンスターだ。って既に戦闘が始まってる。戦ってるのは由生君とフェイトちゃん!。」

「地面に向けて魔法撃ちまくってるけどどういう事?この辺一帯が砂だらけってのも気になるし。」

「ああもうそんな事より封印よ私達圧倒的に数が少ないんだから。由生とフェイトに取られてばかりなんだからねなのは、すずか。」

「レイジングハート。」

「フレイルムデイツシュ。」

「スノートライデント。」

「「ALL RIGTH」」

「デイバイン・シューター」

「フレイルムウィツプ」

「アイスシューター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「今回は戦闘間に合ったみたいだね由生君。」

「ちつ来ちやつたかなのは、アリサ、すずか。だがジュエルシードは俺達が貰うよ。」

「渡さないなの由生君。私達だって戦えるんだから。」

「ボルグレインフリーズスラツシュ。」

「きやあいきなり何するのよ由生。」

「渡さないって言ったるアリサ。だから邪魔してるんじゃないか。【フェイト今の内に戦場を離してくれ。こいつら3人は俺が抑える。】」

「バルデイツシュ。こいつらを誘導行けるよね。」

「GET SET。」

「あつフェイトちゃん待って。」

「フェイトの後は追わせないって言ったるすずか。ボルグレイン。」

「YES SIR。」

「フリーズウォール。これで俺を倒さない限りはお前らは進めない。さあどうする？やるかなのは、アリサ、すずか。」

SIDEフェイト

「由生1人で大丈夫だよな？念の為に【アルフ、アルフ聞こえる？由生の応援に行つてあげて由生1人でなのは達3人の相手を。】」

「了解フェイトすぐ行くよ。場所はどこだい。」

「マンションから東に40分くらいの場所だよ。今は由生1人でなのは達3人を氷の

壁で進軍止めながら戦ってる。」

「マンシヨンから東に40分だね。全速力で飛んで行くよフェイト。氷の壁が見えたら止まれば良いんだよね？その近くに由生達がいるはずだから。」

「うんそう。お願いねアルフ。私はジュエルシードモンスター2頭を相手にしていて援護には向かえそうもないから。」

「了解。あと少しで着くよフェイト。氷の壁が徐々に見えてきたから。」

「由生どこだい？フェイトに言われて応援に来たよ。」

「アルフかここだ。3人相手はやっぱリキツイ。アルフは他の2人の相手を頼む。」

「見つけたよおチビちゃん達。ガブツていくつて言つてたよね前に。」

「あらら増援由生。仕方ないなのは由生を倒して私とすずかでこのお姉さんの相手するから。」

「アルフの相手はアリサとすずかか。その2人は炎熱と氷結持ちだから気を付けてなアルフ。」

「バルデイツシユスマツシャー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「グアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「当たらないよ。サイズフォーム。そしてスラツシユ。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「流石に2頭相手に無傷って訳には行かないね。バルディツシランサーファイア。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「由生、アルフ倒したから全速力で私の魔力を辿って来て。なのは達は無視して良いから。」

「分かった。今すぐ行く。」

「じゃああなたのは、アリサ、すずか。終わったみたいだからあっちに行かせてもらおうぜ。氷は解除してくから追ってくるなら好きにしな。」

「うう結局勝てなかった。私達3人じゃ修行不足なの?。」

「ジュエルシード封印。」

「青はフェイトに赤は俺にそれぞれ回収出来たな。これで残りは青が13個に赤が3個か。」

「うんそうなるね。青はまだまだ探さないとね。」

時間はまた少し経過していく

砂竜のボスからジュエルシードを捕獲せよなの

SIDEなのは

「まさか大島でジュエルシードの反応が出るとは思わなかったなの。しかも裏砂漠からなんて思わなかったなの。」

「この広い砂漠のどこに目標がいるのよユーノ。これじゃあ暑さで体力の方が先になくなっちゃうわよ。」

「水は私の氷溶かせば何とかなるからいいかもしれないけどこんなに暑いと私達の方が先に参っちゃうよ。それでジュエルシードの反応は？」

「徐々にこつちに向かつてきてる。しかも砂を出たり入ったりしてる。これって何かジュエルシードがくつついてる感じだね。」

「ねえユーノ君私なんだかとおも嫌な予感がするんだけど、気のせいかな？。あれって砂竜？大きいのと小型が一緒にいるんだけど、あの大きいのからジュエルシードだけ奪い取れなんて事になってないよね？」

「いや、あの大きいドスガレオスからジュエルシードだけ回収する事になりそうだなのは。ドスガレオスの額にジュエルシードがくつついてるからね。ドスガレオスを気

絶させてその内にジュエルシードを封印して回収するしかなさそう……」

「ドスガレオスにしては大きすぎんだけどユノ君。あれを気絶させてその間に封印処理とかなのはちゃん以外無理なんだけど……。弱点は私が弱点だから気絶までは行けるだろうけど。アリサちゃんの属性はほぼ効かないからあとはなのはちゃんの無属性に頼るしかないんだけど……」

「あたしが属性的に役立たずとかありえないんだけど。なんでこういう時に限って炎属性効かない敵になったりするのよ。まあ言ってもしょうがないわねさっさと片付けるわよフェイトと由生が来る前に。」

「なのはは魔力を封印まで温存しておいて、あれはあたしとすずかの2人で何とかして見せるから。」

「えっ！でも……。私も攻撃したいんだけどアリサちゃん。アリサちゃんとすずかちゃんだけで本当に行けるの?。」

「やってみせるわよなのは。例えば炎が効かなくてもやり方はあるっての。心配しないで気絶直前には攻撃に参加して貰うからそれまで待機してなさい。」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「おっと直線的すぎるわよ攻撃が。そんなのには当たってやれないわね。フレームウィップ。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「ほらほらそんなんじや当たらないよ。アイスバスターシユート。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「アリサちゃんもすずかちゃんも凄いい。もう完全にジュエルシードとの戦いに慣れて
いる。私ももつと強くならんくちや。」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「くつやるわね。狙いは首よフレイムシユーター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「今度はこつちだよアイスシユーター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「なのは今よ。」

「デイバインバスター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「ちよつと危ないわねっいきなり噛み付いてくる奴がいるかあああああああゝ」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「アイスバスター。これで決まるはず。」

グ オ
ン。

「やつと気絶したわねなのは封印処理お願い。」

「封印されるは忌まわしき器ジュエルシード封印。」

「これでやつと4個目かくあたし達は。まだまだ足りないわね Fayette 達の個数には。」

「疲れたし帰って休もう皆。それにしても由生と Fayette 今回は来なかったわね。来ると思ってたんだけど。」

「まあ何かあったんじゃないの？あつちでの用事が。」

その頃時の庭園では

S I D E Fayette

「こんなに時間をかけてたつたこれだけ。これでは褒める事は出来ないわね。 Fayette 残念だけどあなたをお仕置きしなくちゃならないわ。それは？」

「これは母さんについて……。きやああああああ。」

「そんな事をする暇があるならもつとジュエルシードを集めてきなさい。ジュエルシードは母さんの研究に対して大切な物なの。もつと頑張つて頂戴 Fayette。」

「あああああああああはいい母さん。」

「いい加減にしろプレシア・テストロツサ。あんたは仮にもフェイトの母親だろうなんてこんな仕打ちが出来るんだよあんた。娘を道具としか思っていないってのによ。」

「年上に対する口の利き方がなってないわねあなた。あなたはフェイトの何?。」

「フェイトが傷つくのも、痛めつけられるのも黙って見てられるか。あんたがこんなことからフェイトは感情がなくなっていくんだろ?。」

「駄目、やめて由生。これは私が頑張れなかった事に対しての母さんの愛の鞭だから。だからこれ以上は口を出さないで由生。」

「しかし、フェイト………。明らかにやりすぎだろこれは。こんな事されて黙ってるなんて俺には出来ない。」

「仕方ないの由生。私が次からもっと頑張ればいいだけだから。だからここは我慢して由生。」

「フェイト私はあなたに期待しているのよ。次こそは母さんにこんな事をさせないで頂戴ね。あなたの働き次第で母さんは研究を頑張れるのだから。」

「アルフ帰ったらフェイトの治療を頼む。俺はまだ回復系統の魔法を覚えてないから。」

「わかってるよ由生。こんな事なら報告なんかに戻ってこないでジュエルシードを探

しての方が良かったかもしれないねあんたには辛い場面を見せちまったね由生。」

【まさかフェイトの母親があんなのだとは思ってなかったよ俺。フェイト俺の前では無理して明るくふるまってたんだな。母さんからの愛情をあんまり知らないんだなフェイトは。】

【目的の物6個でもお仕置きされるなんてフェイトがかわいそうだな俺としては。10個くらいでも同じ事されてる気もするし全部集めてから報告するしかなかったのかな？アルフ。】

【あの鬼ババアの考えなんかあたしにもわからないよ由生。あたしはフェイトが幸せならそれが1番なんだけどねえ、由生との会話で最近やつと明るくなってきたと思っただけなのにな。】

【帰ったら俺がフェイトのケアに入るよ。アルフは傷の治療だけお願いする。フェイトが悲しいのも痛いのも俺には我慢ならなんだやつぱりな。】

【ごめんよ由生。次の場合はあたしも抗議してみるよ。まああたしが抗議した所であるの鬼ババアは聞きやあしないだろうけどね。もしかしたらフェイトと離れる結果になるかもしれない。それでも言わずにはいられないよね由生。】

【ああ今回はこつちまで攻撃が来なかったけど次はどうなる事やら。俺も次は最初からあの母親に抗議として攻撃するぜアルフ。さあ拠点に帰ろう皆で。】

そして夜は更けていった

ジユエルシード発動そして次元震の驚異なの

SIDEフェイト

「あれ？ここは。私達確か母さんに報告に行つてそれで……私また母さんにお仕置きされて気を失つてたんだねアルフ。由生はどこ？母さんに色々抗議してたらちよつと心配なんだけど？」

「フェイトくやっぱりあの鬼ババアなんかと一緒にいちゃいけないよムニヤムニヤ。由生これからもフェイトのケア宜しくね。」

「ア・アルフ何言つてるの？わ・私は別に母さんと一緒に嫌なんじゃなくて、あれは私が頑張れない愛の鞭だつて何度言つたら……つて寝てるの？アルフ。」

「寝かせておいてやれフェイト。帰つて来てからフェイトの傷の治療で今まで魔力使いつぱなしだったんだから。俺が回復魔法使えればよかつただけどなフェイトすまない。次からはフェイトの母プレシアには何があつても抗議するぜ俺。例え攻撃受ける事になろうともな。だつて俺フェイトが痛いのも苦しいのも嫌なんだ。フェイトにはいつも笑顔でいて欲しいフェイトが笑つていてくれるから俺だつて元気でいられるんだぜフェイト。つて何恥ずかしい事言つてるんだらうな俺。」

「由生（照れ）。恥ずかしい事言っていないで状況はどうなってるの？ ジュエルシードは？」

「なのは達から連絡が来たよ俺達が報告に行ってる間に大島で発動したジュエルシード1個を入手したってな。裏砂漠だから昼間は暑いし夜は寒いそんな場所でジュエルシードを封印したってんだから大した者だよあいつらも。でも今後は渡さないけどな。」

「その内なのは達が持つてる4個も私達が入手しないとだね由生。そしてありがとうアルフ私の傷癒してくれて。」

「そんな事はどういたしましてだよフェイト。あたしはフェイトが幸せならそれで良いんだからね。だからフェイトこの事件を終わらせて早い所由生の気持ちに返事してやりな。」

「ア・アルフ、それは今は関係ないでしょ〜。確かに由生の私への気持ちは嬉しかったから早く返事してあげたいけど・・・。それより今はジュエルシードでしょ。」

「次に発動しそうなのが海鳴市の街中で今は静かに眠ってる状態だな。夜の街中だから見つけづらいし魔力を撃ち込んで強制発動させるしか手がないと思う。そうしたらフェイトお前の出番だ。俺のボルグレインには封印形態はないからな。まあそれはアリサとすずかにも言える事だが。俺ら3人のデバイスには封印形態は存在しないんだ。」

その代わり攻撃のフルドライブとも呼べる形態が備わってるけどな。俺のボルグレインは基本の双剣形態、連結刃の薙刀形態、フルドライブの大剣形態の3つだな。その3つのモードを組み合わせたのがボルグレインになる。まあ俺はなのはの家では剣術習ってるからな今度見せてやるよフェイトにも。」

「海鳴市の街中か。封印失敗すると次元震が発生する恐れもあるねこの場合。次元震が小規模でも街1つを消すには十分すぎる威力があるからね。最悪の場合私が素手で直接止める事も考えないとならない由生。」

「素手でジュエルシードを封印とか普通に暴走してる可能性あるし手にダメージ行き過ぎてるだろそれ。怪我しないでくれよフェイト。お前が傷つくと俺のやる気がダダ下がりしちゃうんだからな。バルディッシュそうならないように頼むぜ封印。」

「お任せを由生様。私が破損してもマスターに直接封印などさせないようにします。これは男と男の約束だ由生。」

「ああ頼んだぞバルディッシュ。それとボルグレイン少しでもフェイトが危なそうな行動するようならすぐに教えてくれよ。俺も直接封印の魔力を少しでも出してみるからよ。ボルグレインには封印機能はないけど俺だってそれくらいは手伝えるはずだ。」

「さて、そろそろ出発しないか？アルフ、フェイト。多分なのは達も探し始めてるだろうしな。どっちが先に手に入れるか勝負と行こうぜ。まあフェイトが負ける訳ないけ

どな。」

「そうだね由生。あたしのフェイトがあんなちびちゃん達に負けるはずがないよ。あたし達はあたし達の仕事をすればいいだけだね今回は。」

【見つけたぞフェイト、アルフ。発動前のジュエルシードだ。向こうもまだ気づいてない。ジュエルシードに魔力を撃ち込んで強制発動させた後速攻で封印するよフェイト。】

【了解由生。私が魔力を撃ち込むから少し離れてて由生。眠れるジュエルシードよ目を覚ましなさいはあああああああああああ。】

「強制発動？こんな街中で。なのはあつちも気づいてる強制封印をお願い。」

【フェイト今だ強制封印の砲撃を。】

【了解由生。「行くよバルディツシュ。】

「スパーク・スマツシャー」

「レイジングハートお願い。」

「デイバイン・バスター。」

【「シュート！」】

「なのは向こうより先にジュエルシードを。」

【フェイト向こうより先にジュエルシードを。】

「させないよ！ユーンとか言ったっけ？これ以上邪魔するんなら問答無用だよ。」

「クツ！やっぱり使い魔。あの娘の使い魔か？だとしてもジュエルシードは渡せない。」

「アリサ、すずか悪いがフェイトの邪魔はさせないよ。少しでもこっちはジュエルシードが必要なんだ。悪いが相手してもらおうぜ。」

「由生あんた本気でフェイトの側につくみたいね。こうなったら遠慮しないわよ由生。私達だってやれるって所見せてあげるわ。」

「由生君本当にフェイトちゃん側なんだね。私だってアリサちゃんと一緒にやれるって事見せてあげるからね。」

「できればなのはとは戦いたくなかった。でも邪魔をするなら仕方ないから相手になるよなのは。」

「私もできればフェイトちゃんとは戦いたくない。だけどジュエルシードを集める理由をまだ聞いてないし私もユーン君の手伝いは譲れない。ジュエルシードを巡る限りお互いに争いあう事は避けられないんだ。だから私が勝ったら聞かせてもらうよフェイトちゃんがジュエルシードを集める理由を。」

「勝てたら話してあげるよなのは私がジュエルシードを集める理由でもなんでも。さあやろうかなのは。フォトンランサーファイア。」

「これくらいは当たってやれないなの。デイバインシューターシュート。」

「当たれない。フォトンランサー。」

「当たらない。ショット・バスター。」

「くっ！弾くしかないか。サイズ・スラッシュ。」

「当たれないの。デイバイン・バスター。」

「きやああああああああ。このままじゃ。速度で振り切ってジュエルシードを封印した方が良くかも。よしっそうと決まれば。」

「あつ！待ってフェイトちゃん。追いつかなくちゃレイジングハートもつと速く。」

「よしっ！ジュエルシード封印。」

「追いついたジュエルシード封印。」

「ガキン！」

「きやああああああああ。バルディッシュ？。いけないバルディッシュ戻って。」

「きやああああああああ。レイジングハート？大丈夫。って埋まっちゃって動けない。」

「マスター由生。このままではフェイトが危険です。強制封印する気ですジュエルシードの暴走を。戦いは先延ばしにしてフェイトの援護に向かう事をオススメします。」

「くっ！アリサ、すずか戦いは先延ばしだ。俺はフェイトを助けに行く。お前達はそののを助けに行かないのか？。これ以上は邪魔するなよ。今行くぞフェイト。」

「なのはちゃん埋まっちゃってるけど大丈夫？今助けるね。」

「すずかちゃん私よりフェイトちゃんを。」

「大丈夫よなのはそつちは由生が行ったわ。だから多分大丈夫。」

「フェイト駄目だ危ないやめろ。って言っても聞かないよなこの場合。仕方ないフェイトの手を守るぞ。ポルグレイン俺の手に最大の魔力障壁を。止まれ、止まれ、止まれ、止まれ。ぐああああああああ」

「あつ！由生。私の為に手が………大丈夫？由生。」

「これくらいフェイトの手が傷つくよりはなんともないぜ。しかし、ジュエルシードは封印出来たな。さっきの暴走が次元震か？小規模っぽかったけど凄まじいエネルギーだったな。」

「フェイトバルデイツシュに格納を。なのは達また次のジュエルシードで会おうぜ。じゃあな。」

「フェイトちゃん、由生君。結局私また何もできなかった。危険だつてわかっていたのに。ユーノ君私もつと強くなるよこれから先も。」

「なのは………」

そして夜は更けていく

それは初めての共闘なの

SIDEフェイト

「フェイトバルディツシユの様子はどうか？あのエネルギーを受けたんだからまだ復帰に時間がかかるだろうが。」

「バルディツシユはさつきリカバリーかけたばかりだから丸1週間は使い物にならないね。それはなのはのレイジングハートも同じだろうけどね。」

「由生、フェイト今回の次元震で管理局が動くななんて事にはならないよね？管理局に目をつけられたら色々と厄介になるからさ。」

「俺はその管理局が何なのかわからないから断言しようがないけどあれくらいで動く管理局ならそんな大したチームじゃないだろうおそらくな。」

「アルフは心配しすぎだつてば。あれくらいの次元震で動く管理局じゃないよ。由生の言う通り気にしすぎだだつてアルフ。」

「だと良いんだけど……あたしは嫌な予感がするんだフェイト、由生。どうにも嫌な予感が頭から離れない。」

「ねえ由生この青いジュエルシードだけど、ボルグレインで今日だけ預かってくれな

い？」

「ああ構わないぜボルグレイン！つていててつやつぱりあの時のダメージで今日だけは上手く手を握れねえや。」

「PUT IN。」

「あつ治療するよ由生。そこに手を置いて横になって由生。今日は私の代わりにごめんね由生これが私の手だったら気にせずに済んだのに。」

「馬鹿な事を言うなよフェイト。誰の手でも怪我したら痛いっての。俺が自分でフェイトを庇ったんだから私の手ならとかそんな事言うなよな。」

「う・うん。悪かったよ由生。でもよく封印出来たよねあのジュエルシードの暴走を。下手したらあのジュエルシードだけ破壊しなきゃならなかったんだから。」

「言われてみれば確かにその通りだったな。破壊で1個ジュエルシード紛失にならないくてよかったよ本気でな。1個粉碎なんて事になってたらと考えると恐ろしいわ本当に。」

「はい治療終わったよ由生。お願いだから今後はこういう無茶だけはしないで。例えば私が危険になっても由生が傷つく事はやめてね。私だって由生が傷つく所は見たくない。」

「俺だってフェイトが傷つく所なんか見たくないからそこだけはわかってくれフェイ

ト。だから無茶だけはするんじゃないぞ。治療ありがとうな」

「どういたしまして由生。」

「それより2人ともいつまで手を握り合ってたんだい？ いい加減お腹いっぱいなんだけど……」

「あつご・ごめんね由生。治療したばかりなのに手を握っちゃって。」

「こつちこそすまんフェイト治療したばかりなのに手に力込めて握っちゃって。」

「はあああああやれやれフェイトに告白した由生だけどこれじゃあ先が思いやられるね。」

「さて、今日は寝よう2人とも。明日からはまたジュエルシード探しをしなくちゃならないんだから。」

「じゃあ俺はなのはの家に帰るな。あそこが俺の現在の住まいだしよ。それになのにも謝らねえとならないしなこの手の怪我で。」

「あつじやあまた明日ね由生。なのはにもごめんって伝えといて。」

「あいよフェイト。お前が気にする事じゃねえよこの手についてはな。だからなのにもごめんじゃねえよお前からはな。」

「ありがとう由生。じゃあまた明日ね。」

そして由生がなのはの家に帰りついて

SIDEなのは

「ただいま帰りました。」

「お帰りの由生君。私に何か言う事ないかな?なの。」

「ジュエルシードの暴走に対して危険な直接封印した事については正直すまんのは。だが、フェイトを守れたし俺としては名誉ある負傷だと思ってる。治療はフェイトがしてくれたから安心しろ。まだ手は握れないけどな。」

「もう由生君は無茶しすぎなの。人に無茶するとか言つといてあれは無茶なんじゃないの?手だつてこんなに怪我してるし無茶しすぎなの。」

「すまないなのは。なのはだけじゃないあの場にいた全員にすまないだな。俺の無茶のせいで心配をかけた。」

「えへへええこれなくんだあ由生君?。」

「いいテープレコーダー!なのはお前どこからそんなもの持ちだしたんだよ。」

「えへへええお父さんから借りちゃった。明日アリサちゃんとすずかちゃんにも持つて行つて聞かせようつと。」

「なあああああああ何言ってるんだなのは。そ・それだけはやめてくれ頼む。」

「じゃあ今日封印したジュエルシード出して。それなら明日聞かせるのはやめてあげるなの。」

「ジュエルシードは出せん。あれはフェイトの物だからな聞かせたけりや好きにしろ。」

「確かに聞いたからねえ。由生君。じゃあなのは好きにさせてもらうよ。」

「さあもういいだろうなのは明日も学校があるんだ。今日はそろそろ寝ないとな。俺は風呂入ってから寝るけどな。」

「ううう。由生君がつかないよ。いいもん明日恥をかくのは由生君だもん。」

「まあ確かに俺は恥をかくけどな。それを言ったらなのは過去のもばらしちまうかもな。いい子でいなきやならなかった寂しい過去を。」

「そ・それ言ったら由生君でも許さないからね。あの時のなのはどうかしてたのお父さんが入院してたからっていい子でいなきやなんて。」

「言う訳ないだろ今回ののはばらされても仕方ない俺の落ち度だしな。さてじゃあまた明日なのは。」

「うんお休みなさいなの由生君。」

その頃時空間では

SIDEクロノ

「やつと事件が動き始めましたねクロノ執務官。それで該当魔導士2組はどうしてるのかしらっ?。」

「小規模とは言え次元震ですからね艦長。今は2組とも動けないかと。次回あの2組がぶつかり合う事があれば自分が出ます艦長。」

「お願いしますねクロノ。それはそうと旅は順調かしら?。」

「順調ですよ艦長。次こそは次元震を発生させずに食い止めて見せます。それと事件の中心人物とも思える2組の魔導士についても。」

「頼もしい限りですねクロノ執務官。さて管理外世界とは言え小規模な次元震放つておくわけにはいきません。迅速に解決に向かいましょう。」

「クロノ執務官すぐにでも出られますね?。次こそはクロノ執務官の出番ですからね。」

「お任せを艦長。あと1人ジュエルシード発掘で連絡が取れなくなってるスクライア一族の考古学者がいましたね。その者についても探し出さなくては。」

「ああスクライア一族から搜索願いが出てる彼ですか。確か名前はユーノ・スクライアでしたね。」

「ユーノ・スクライアいったいどこで何をしているのやら?。これ以上はスクライア一族に心配かけるだけだつてのに。」

「本当にどこにいるんでしょうかねえ。今。無事ならいいのですけど。」

「全くだ。一族の者にも連絡せずに1人で何をやっているのやら……。連絡く

らい入れればいいのに。」

「さて、発掘されたロストロギアしっかりと回収していきましよう皆さん。」

「はい。」

そして翌朝になり学校で由生の恥ずかしい告白がばら撒かれる等があり1週間後の夕方

SIDEフェイト

「バルデツシユ気分はどう?。」

「リカバリーコンプリート。」

「そう。さて、今日からまたジュエルシードを探していくよ由生、アルフ。」

「そうだなフェイト。今日からまた再開だなジュエルシード探しを。俺の手もだいぶ完治してきたしな最近になって。まあ本当になのはが俺の録音を流すとは思わなかったけどな次の日に。」

「あははは災難だったね由生。でも今回は渡せないよねジュエルシード。」

「その通りだなアルフ。今回はどんなジュエルシードモンスターでも渡せないよなやつぱり。」

「まあよほどの強敵なら共闘になっちまうけどね普通に。」

「まあ最近はジュエルシードモンスターも強くなってきてるし共闘もありえるかも

な。っと見えてきたぞフェイト、アルフ。今回は樹のモンスターのような。」

「樹かい今回は。じゃあ火の魔法が良く効きそうだね。こつちには炎熱変換能力持ちはいないしちと厄介だねえ。由生向こう側。」

「なのは確か。あつちもジュエルシードを封印する気満々みたいだし今回は属性的に共闘な流れかな。アリサ、すずか、なのは今回は共闘と行かないか？ジュエルシードの癖にバリアを張るんだよこいつ。」

「バリア張るの？こいつそれはちよつと厄介だねえ。由生。でもジュエルシード封印までは共闘するけどその後は奪い合いよ。」

「しようがないねえ。そればかりは。じゃあ共闘と行きますか。なのは、フェイト砲撃してくれ。」

「スパーク・スマツシャー。」

「デイバイン・バスター。」

「パキイイイイイイイイイイイイイイイイイ。」

「やっぱりバリア。今だよ由生、アリサ。」

「ボルグレインフリーズ・スラツシュ。」

「フレイムデイツシュフレイム・スラツシュ。」

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「すずか!。」

「アイス・バスター。」

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「今だよなのはちやん封印を。」

「フラツシユ・ムーヴでえええええええええええい。」

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシード封印。」

「さて、共闘もここまでだな。さあて奪い合うかこれを。」

「そうだね奪い合うしかないよねジュエルシードを。」

「「でえええええええい。」」

「ちよつと待った。そこまでだ君達。時空管理局囑託魔導士クロノ・ハラオウンだ双方素直に話を聞かせて欲しい。」

「管理局!ズドドドドドド撤退するよフェイト、由生。」

「クツ!シールドを。」

「アルフが攻撃してくれてる今の内にジュエルシードを。」

「させるかスナイプ・ショット。」

「スナイプ・ショット。」

「きやああああああああああ。」

「フェイト！。おい！クロノとか言ったなてめえフェイトに何しやがった（ブチツ）。アルフフェイトを連れて先に帰還してる俺はこいつにちよつと用がある。何こいつの攻撃なんかには当たらねえよ。なのは、アリサ、すずかもこいつから離れて見てろ。ちよいと荒つぽくやる事になるからよ。」

「由生君が見ていて怖い。アリサちゃん、すずかちゃんここから離れようなんだか嫌な予感がするの。」

「おつと戦闘開始前にボルグレインにジュエルシードを格納してとさあどこからでも来いよクロノ執務官とやらボルグレインフリーズ・シューター。」

「フリーズ・シューター。」

「うわああああああああああああああああああ。これでもくらえっステインガー・スナイプ。シヨット」

「ふんっ！当たらねえよそんな攻撃。フリーズ・バスター。」

「うわああああああああああああああああああ。ならこれでブレイズ・キャノン。」

「当たらねえって言うてるだろ。フリーズ・スラッシュ。」

「うわああああああああああああああああああ。ならステインガー・ブレイド。」

エクスキューションシフト。」

「当たらねえよだからな。これで止めだフリーズ・ブレイド。」

「うわああああああああああああああああああああ。グフツ。そんなこの僕が」

「アリサ、すずか、なのは協力するにしてもよく考えてからの方がいいぞ。こいつは奪い合いを邪魔したんだからな。このジュエルシードは俺が貰っていく。じゃあな皆。」

「わかったの由生君。じゃあフェイトちゃん、の傷早く良くなるといいね。」

そして次回へ続く

遂に出現その名は時空管理局なの

SIDEフェイト

「今戻ったぞ〜フェイト、アルフ管理局の執務官とやらはあつけないほど倒せちまつたよ無傷でな。」

「仮にも管理局艦船の切り札だよあいつ。それをよく無傷で倒せたねって誰？あんな。」

「お帰りなさ〜（ピシッ）あなた誰ですか？由生の声が聞こえたと思っただけだ。」

「嫌だなフェイト、アルフ俺だよ由生だよ。」

「ええええええええええええええええええ。」

「はい由生鏡。今の自分の姿を確認してご覧。」

「えっ？ どこかおかしい（ピシッ）。な・なんじゃこりやああああああああああああああああああああああああああああああ。俺の髪の毛と瞳の色が紫になってる〜へ。いったい何がどうして……。」

「あの時由生は怒ってプチ切れたよね確か？。その影響なんじゃないかなこれ。」

「じゃあ何か？怒りによって目覚めた伝説の超魔導士的な？そんな感じなのかこれ。」

「確か執務官に私を攻撃されてブチ切れたのだけは私も覚えてる。あの時の由生かっこよかったよ。でもそれが原因で髪と瞳の色まで変わるなんて……。アルフちよつと魔力測定してみようよ今の由生の。普段がAA+だったのは覚えてるから。」

「じゃあすぐに調べられるようにこの部屋でセッティングするよフェイト。由生暫くはそのままでけど我慢しておくれよ。」

「結果が出たねアルフ。由生あんまり切れない方が良くよ寿命縮めるからそれ。そしてこれは驚いた結果だねアルフ。ブチ切れた由生の魔力量って母さんには及ばないけど6段階アップのS+まで上がってるなんて。そんなに私を攻撃したあの執務官が許せなかったの？由生。まあその気持ちは素直に嬉しいけどそこまで切れる案件だった？由生。」

「あの野郎警告もなしにいきなりフェイトに発砲して傷つけやがった。いくら俺でもそれだけは許せねえ。今頃なのは達は管理局に捕縛されて今後はジュエルシードは管理局が探すからあなた達は元の生活に戻りなさいとか言われてるんだろうな。自分達に都合良く取り込む為にまあそうしない為に帰り際に良く考えてから返事をするんだなって言ってきたけどな俺。」

「おっと噂をすればなのは達から念話だフェイト、アルフ。少し黙っててくれよ。」

「どうしたなの？俺に念話接続するなんて珍しいじゃないか。いつもは口頭で伝え

てくるのにさ顔合わせてから。さては、管理局に関してか？この念話は。」

【その通りなの由生君。あの人達フェイトちゃん達の事は忘れて元の生活に戻りなさいとか言ってきたんだよ？それに反論しようとしたら民間人だから協力させられないの1点張りでもうね頭来るよ本当に。】

【まあそれが向こうの戦略だからなこの場合。なのは達を自分達に都合良く組み込む為の方便って奴さそれはな。そのまま協力申し出るんじやねえぞなのは。ならこう言つてやれ友達の間を覚まさせるのに民間人とか軍人だからって関係あるんですかってな。それでも黙らないようならクロノはなのはよりは年上だからお兄ちゃんとか呼んでやれば1発でノックアウトできるだろうよ。あいつ女に関しては免疫なさそうに見えるからよ（笑）これで駄目なら泣きそうな顔で3人で上目遣いに見てお兄ちゃん発言してやれ。そうすりやあなのは達の自由行動を認めてくれるだろうよ（笑）】

【あつその手があつたかちよつとやってみるね由生君。】

【くれぐれも嘘だとバレないようにやれよなのは。】

【わかっているの由生君。色々と教えてくれてありがとうね。】

【早速効果てき面なの由生君。クロノ君も慌てるの。】

【やつぱりあの執務官は馬鹿だな。こんなのが執務官だとはとても思えない。】

【これであの執務官も少しは考えるだろ。お前らを命令系統に組み込もうとかはなく

なると思うぜ。」

【色々とありがとうなの由生君。】

【あとは命令拒否権は取つといた方が良いぞ3人ともそうじゃないといざという時自由に分けないだろ。】

【命令拒否権あんまり使いたくないなの。でもフェイトちゃん達を止める為には使わないとな。】

【俺達だって遠慮しないからなのは。多分決戦は海の上になるだろうからな。俺達だってジュエルシードは渡さないぜなのは。】

【負けないなの。でも何で海の上ってわかるの?。】

【多分いくつかのジュエルシードは海の中に落ちてる気がするんだ俺としてはな。まあ本当かどうかはわからないけどな。】

【本当にありがとうね由生君。じゃあまたね由生君。】

【ふうふううやつと念話が終わったぜ。すまないなフェイト、アルフ。念話が長くなってすまない。あの執務官の対応策をなのはに教えてた。】

【しょうがないね由生。しかし、管理局も無駄な事が好きだねえ、あの娘達を戦力として命令系統に組み込もうとするなんてさ。あの娘達だって命令系統に組み込まれるのは嫌だろうに。】

「その為になのは達には命令拒否権取つとけつて言つといたアルフ、命令拒否権さえあれば決戦が海の上になろうとも大丈夫だからな。」

「決戦が海の上の根拠は？由生。私には海に落ちたとか今はまだ分からないしどうしようもないと思うんだけど？」

「それに関しては完全に俺の勘だなフェイト。何となく海の中にいくつか落ちていて気がするんだ。」

「さあここからは管理局に補足されないように探す必要があるから今までよりも難しくなるぞ動きが。」

「うんそうなるね由生。ジュエルシードは探す、ただし管理局に見つからないようにだよね由生。」

「その通りだよフェイト。管理局が動いたとなると厄介だからな。俺もこれから先はなのはの家に帰る訳にはいかねえやフェイトこのマンションで一緒に過ごしてもいいか？フェイト。」

「それは構わないよ由生。私達の立派な協力者だしね、このマンションで一緒に暮らしながらジュエルシード探そう由生。」

「ありがとうなフェイト。さて、管理局がここを見つけないのを祈るばかりだな。」

「さて、1回引つ越し準備の為になのはの家に帰るわ俺。じゃあまたあとでなフェイ

ト。」

「うんまたあとでね由生。」

「さて、桃子さんには納得してもらわないとな。」

SIDEなのは

「ただいま帰りました桃子さん。」

「急で悪いんですが、遠見市にある高級マンションに引越する事になりましたので自分の物を全部持って行きたいんですが良いですか？桃子さん。」

「急すぎるわよ由生君。今まで私達が家族同然として接してきたのにいきなりどうしたっていうの?。」

「なのはのかかわってる事は聞きましたよね?あれには俺もかかわっているのだから知られたくないので暫くは遠見市のマンションに引越しをという訳です。なのも荷物を抱えてアリサ、すずかと一緒に出掛けましたよね?桃子さん、あれも俺がかかわった結果です、でもなのには怪我なんかさせませんよ。もちろん俺とその協力者にもね。」

「そう言う事なら仕方ないけど、あとで必ず帰ってくるんでしょねここには由生君。」

「全てが終わったら帰ってきます必ず。まあその前に帰ってくるかもしれないけど

ど。」

「それならよし、思う存分その協力者の元でやってきなさい由生君。まあこんな夜にやつてる引つ越し業者はないから明日以降になっちゃうけどね引つ越しは、だから今日はあなたの部屋でゆっくりしていきなさい。明日からはそっちに移るんでしようから最後の思い出作りね由生君。」

「そうします桃子さん、また急な話ですみませんでした。俺自身そのなのは達の協力組織に俺一人で喧嘩吹っ掛けちゃいましたので事件終わったらその娘と一緒に逮捕かもしれませんけど……ではおやすみなさい桃子さん。」

「おやすみなさい由生君。」

「それにしても由生には驚かされたわよねえくなのは。まさか3人揃って命令拒否権取つとけとか言われた時は。まああたし達を命令通り動かそうなんてちよつと考えが甘いんだけどね。」

「でもアリサちゃんもすずかちゃんも良く親が許可してくれたね。どうやったのかな？アリサちゃん、すずかちゃん。」

「それぞれのデバイスに格納されているジュエルシードを見せたらあつという間に決まっちゃったわよなのは。もちろんシャークがあたしを守ってくれる事前提だけだね。」

「私もアイリが私を守ってくれる事が前提条件だけね勿論。それでもやっぱりこの事件を無視する事なんて出来ない。だから一緒に頑張ろうなのはちゃん、アリサちゃん。」

そして夜は静かに更けていく

それは火の鳥、強大な竜種なの

SIDEフェイト

「よしっ何日かかかっちまったけど引っ越し完了だぜ。さあフェイト、アルフ探しに行こうぜジュエルシード。管理局だつて探してるはずだしな。」

「うん由生。管理局チームには負けられないよねやつぱり。」

「さあ行こうよフェイト、由生。管理局だつて動いてるんだ早くしないと管理局に奪われちゃうよジュエルシードを。もうフェイトのあんな姿はあたしは見たくないよ。」

その頃アースラでは

SIDEなのは

「由生君達もジュエルシードを探してるはずだし、負けられないよね。今日は私とアリサちゃんの出撃ですすかちゃんはアースラで待機だし3人揃つて出撃はあんまりなさそうだね。まあ命令拒否権はいざという時まで使わない方が良いよね。じゃあすすかちゃん行ってくるね。」

「気を付けてねなのはちゃん、アリサちゃん。私も出撃できればもつと楽かもしれないなかつたんだけど。相手は火の鳥みたいな竜種なんだし。」

「属性的にあたしはあんまりダメージ期待できないのよねえ。今回。でも出撃になったからにはやるだけやってやるわ。竜種が何だつてのよ火属性だからつてなめんじやないわよ。」

「ユーノ兄さん、シャーク兄さんお2人をどうかお願いしますね。皆が怪我しないで帰ってきますように。」

「アイリは心配性だな。あれくらい俺とユーノのサポートがあればなんとかなるつての。」

「大丈夫なのはとアリサは僕達が必ず守つてみせるよアイリ、だからそんなに心配せうな顔しないで。僕達だつてただのサポート魔導士じゃないんだから。」

「行こうユーノ君、シャークさん、アリサちゃん。今はジュエルシードを封印する事が先決、見つかったのが由生君達に奪われる前に回収しちやおう。」

「由生達もジュエルシードを集めてるんですものね。負けてられないわ。未だに3個しかこつちは回収できてないし。さあちやっちやと回収するわよシャーク。」

「燃えているなアリサ。だがその燃え方嫌いじゃないぞ。その域だアリサ、次こそ負けないという気持ちも大事だぞ。」

「暑苦しいよシャーク。もつと暑苦しくない言い方出来ないの？シャーク。」

「そんな事言つてもよユーノ兄さん、これが俺の普通の喋り方だしな。」

「皆お喋りはそこまで、そろそろ転移が終わるし戦闘空域だよ。」

そして転移が終わり

「大きいこれが竜種いつたいどれだけ大きいの？つてこれって確かりオレウスだったはず。なんて大ききなのこんな大ききが暴れ始めたら……」

「ちやつちやつと封印するしかないわね。こいつの炎ブレスには要注意だけどねなのは。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「開幕の方向なの。まずいな。」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「ぎやああああああああああああああああああああああああああああ。まだまだくフレイム・シューター。」

「デイバイン・シューター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。グアツ！グアツ！グアツ！」

「なのは、アリサ。守らなきやプロテクション。うわああああああああああああああああああああああ。」

「ユーノ君！、デイバイン・バスター。」

「ユーノ！、フレイム・バスター。」

「グオオオオオオオオオオオオ　ン。　ブ　ワツ　キ
 シヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「きやああああああああああああああああああ。あれ爪が掠つただけなのになんだかフラフラするのユーノ君。」

「まさか毒性の爪なのか今の攻撃は。まずい治療しないと。」

「なのは！フレイム・スラツシユ。」

「クソツたれ！フレイム・アロー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ　ン。

スウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ　グ

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「ま　ず　い　ブ　レ　ス　よ！　全　員　防　御　を。」

きやああああああああああああああああああああああああああ。まさかプレスにここまでの威力があるなんて。」

「熱の熱さも相当なものなの。このままじゃ先にこつちが倒されちゃうなの。」

「皆回復しないと。そうだ由生から渡されてたこれなら。皆これ飲んで。」

「あつ！傷が回復していくの。これはいい。」

「今までの傷が回復して体力までも回復した。この薬はいい。」

「由生からこういう時の為につて渡されてた回復薬グレートだよなのははこれも飲んでいて。」

「青い液体？これはいったい何？ユーン君。」

「由生曰く解毒薬だそうだよそれは。さっきなのはは毒爪攻撃受けてたでしょ？それ飲んで毒消さなきゃ。」

「由生君。ゴクツ！ゴクツ！ゴクツ！。毒が消えていく感じがするなの。」

「デイバイン・シューター。」

「フレイム・スラッシュ。」

「フレイム・アロー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオン。グアッ！グアッ！グアッ！」

「見えるなの、当たらない。」

「見える、当たらないわよ。」

「フラッシュ・ムーヴ。」

「フレイム・シューター。」

「フレイム・ブラスト。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオン。グアッ！。グアッ！。グアッ！。グアッ！。グアッ！。」

「やっぱり熱い温度だわねこの炎。でもあと少し、フレイム・スラツシユ。」

「あと少しデイバイン・バスター。」

「喰らいなっ！フレイム・アロー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

スウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

グン。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。

「こ　こ　で　ま　た　ブ　レ　ス　な　の　！　皆　避　け　て　く

ぎやあああああああああああああああああああ。」

「ハアハアハア。ここに来てのプレスはかなり効いたなの。でも倒すしかない。デイ

バイン・シューター。」

「フレイム・スラツシユ。」

「フレイム・アロー。」

「プロテクション・スマツシユ。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ　ン。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「あ・危なかつたなの。でもようやく倒れてくれた。レイジングハートジュエルシー

ド封印。」

「SEALING」

「漸く封印完了ねなのは。あたしあんなでかいのはもうこりこりよあんなに火力あるなんて思ってたわよりオレウスが。ユーノ体力回復全員分お願いね。」

「うん任せてアリサ。僕ももうこりこりだよこんな相手は。」

「皆今日はお疲れ様。もう少しだけ転送待っててね。戦闘の余波で回収が遅れそうだから。」

「「は〜い。」」

「しかしリオレウスったかあんなに火力ある連中で向こうは特訓してるのか？こりやあ俺達も特訓した方が良いんじゃないかねえか？ああいうので。」

「正直特訓した方が良いんでしょうねああいうので。回避の練習にはもってこいだわアレ。」

「なのは達もあれでアイテム持ち込んだりした方が良い気がするの。いつまでも由生君には頼ってられないなの。」

そして時間が過ぎアースラに回収された後

「なのはちゃん達良く倒せたねアレを。正直もう駄目かと思っちゃった。アイリもユーノ君と一緒に回復お願いね皆の。」

「任せてくださいですか。しかし、皆さんお疲れさまでした。フィジカルヒール。」

「あ、傷が治っていくありがとうございますアイリさん。しかし、この火傷の後だけではどうしようもありませんね回復魔法でも。」

「火傷したって事はごまかせるけど火傷の後だけはどうしようもございませんわね私にもこればかりはお医者様に見て貰わないと。」

「君達良くやってくれた。リオレウスとか言ったか？あれのサイズを見た時は正直絶望したよ僕は、あんな大きなのがジュエルシードの異相体なんて思ってたなかった。あれはいったい?。」

「あれは私達の世界でも大人気なゲームモンスター○ンターってやつに出てくる大型モンスターなんです。あれほどのサイズになると金冠サイズでしょうけどね。」

「金冠?良く分かんが最大サイズって事で良いのかい?それは。」

「はいそれであつてます。しかし最大サイズが出てくるとは思わなかったなの。」

「ジュエルシードもこれで4個目だし残りは青が12個赤が3個で間違いないね。」

「半分はすぎたけど、それでもまだ青が10個以上かゝばら撒かれてるな。」

「まあそれでもやるしかないでしょ。残り12個探すしかないわね。」

「まだ青が10個以上あるのか?これで。エイミイ残りのジュエルシードのサーチ素早く頼むぞ。」

そして次なる舞台へ突き進む

寒空の中の決闘なの

SIDEフェイト

「なのは達がどうやら1つジュエルシードを封印したようだフェイト、アルフ。なお異相体はリオレウスだった模様。」

「流石にそこに入り込んで奪うなんて真似は出来ないね由生。しかし、リオレウスとはプレスがかなりプレスの威力が高いからね、なのは達良く生きてたねあの高威力のプレスに空中からの毒爪攻撃で体力はかなり削られるからね。リオレウス相手に良く生き残れたなあ〜本当に。」

「こういう時の事を考えてユーノには回復薬グレートと解毒薬だけは渡しておいたかな俺が。それでも結構消耗は避けられないと思うけどな。解毒薬だけは1個しか渡さなかったから2回以上毒にされたらアウトだけどな。回復薬グレートも10個だけだしな渡したのは。」

「それでも生き残れるとは正直思ってたの私は。こっちもリオレウス系統出てきたら危ないけどね。」

「そろそろ反応地域だお喋りはここまでだな行くぞフェイト、アルフ。って妙に寒く

ないか？この辺り。」

「そう言えば……あの赤いのってテオ・テスカトル？だとしたら寒いじゃなくて熱いだし……まさかあの赤いのって。」

「間違いないな。赤いジュエルシードの異相体の1つだな多分身体が赤いトア・テスカトラだなあれは間違いなく。そしてあと2体異相体がいてもう1体も赤いジュエルシードだなくてもう1体の赤い異相体はラージャンか。もう1体は青いジュエルシードの異相体だな。」

「青いジュエルシードの異相体はリオレイア亜種か。今回は結構苦戦しそうだね。管理局側も呼ぶ？由生。」

「管理局ではこの3体は相手出来ねえよ。俺とフェイトとアルフでやるしかないな。ラージャンは俺が、フェイトはトア・テスカトラを、アルフはリオレイア亜種を頼む。それぞれ弱点はつけるはずだからこれにしたがどれか1体封印したら回収してから応援に行くって事で。」

「了解由生。」

「じゃあ封印を始めようか散開。」

「散開の前に由生のボルグレインに1回だけの封印魔法を込めておくよ最後に使つてねスラツシュに込めておくから。」

「すまねえなフェイト。今度こそ散開して片付けるぞ皆。」

SIDE由生

「さあやろうかラージャン。」

「ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「まずは開幕の咆哮からか。お決まり通りだな。ボルグレインフリーズ・シューター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「おっと大振りすぎるぞラージャン。フリーズ・アロー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「おっとラージャンお得意のプレスか。危ねえあとちよつとで当たる所だったぜ。ボルグレインフリーズ・バスター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「おつ と 挿 ん で き た かっ て 早 い ぐ

わああああああああああああああああああああああああああああ。ハアハアハアハアボルグレインフ

リーズ・ランサー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。ボサツ！
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「おつと怒ったかラージャンよ。だが当たらねえよそのブレスは。ボルグレインプ
リーズ・シューター・バニシングシフト。」

「グオ？　グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン、

「回転しての体当たり狙いか。だが見切った。ボルグレインプリーズ・バスター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン。ハアハアハア

「大振りすぎて当たらねえぞラージャン。これで止めだボルグレインプリーズ・ス
ラツシュ。忌まわしき器ジュエルシード封印。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン。

「ボルグレインプ封印したジュエルシードの回収を。」

「SEALING」

「フェイトの救出に向かうぞボルグレイン。」

「愛する妻救出ですね了解です由生。」

「下らねえ事言つてんじやねえよ、まあ愛する者つてのは間違つちやいねえがな。」

そして場面は切り替わり

SIDEフェイト

「グルウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ。」

「本当に雷効いてるのかな？体力は減つてるとは思うんだけどいまいち実感が持てないよバルディッシュランサーセット。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。ン。」

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。

「突進のスピードは速いけど私には当たらないよ。」

「遅くなつたなフェイト。ラージャンは片付けたから応援に来たぜ。ボルグレインスラッシュを。」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。ン。ウ

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。

「おつと危ない。行くぞフェイト。ボルグレインバスターを。」

「バルディッシュスパーク・スマッシュャー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「氷のブレスか、ちようどいいボルグレイン吸収しろお食事の時間だ。」

「いただきますバクン。」

「相手の冷気を食べちゃったの？由生。ボルグレインは。」

「ああそうだフェイト。相手の凍結属性を吸収する事で一時的にパワーを上げる事が出来るんだこいつは。ボルグレインブリザード・シューター。」

「バルデイツシュサンダー・レイジ。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ハアハア
ハアハア」

「そろそろ止めだなフェイトサイズフォームを。ボルグレイン^{ザンパーフォーム}大剣形態。」

「バルデイツシュサイズフォーム。」

「^{ザンパーフォーム}大剣形態。」

「ボルグレインブリザード・セイバー。」

「バルデイツシュサイズスラッシュ。ジュエルシード封印。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ン。」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン。」

「ボルグレイン回収を。」

「SEALING」

「あとはアルフだけだな。行こうフェイト。」

「うん由生。」

そして場面はまた切り替わり

SIDEアルフ

「こいつのブレスは高火力だったし尻尾は猛毒だったね確か。由生とフェイトが来るまでに尻尾だけでも切断しておかないとねこいつの。あたしも近距離魔導士だから危ないし。」

「ガアア。」

「尻尾に向けてフォトン・ランサー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン。グアツ！グアツ！ブ
ンツ！」

「おっと早速2回突撃の後尻尾攻撃かい。それが隙だよりオレイア亜種。ライトニン
グフオール。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
スウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「やっぱり熱いねえくブレスは。つとどうやらあたしが一番最後つぽいねフェイト、由生。」

「アルフ大丈夫か？これを飲め回復薬グレートだ。」

「ゴクツ！ゴクツ！ゴクツ！サンキュー助かったよ由生。あたしが一番最後なんだろう？フェイト。」

「うん！そうだよアルフ。既に赤いジュエルシールドは由生が2個とも回収してるボルグレインに。」

「やっぱりそうだったかい。じゃあいつちよ行くかねこいつを倒しに。」

「フェイトはサイズフォームで尻尾の先端狙ってくれそこが弱点の1つだから。俺とアルフで本体を攻撃していく。」

「わかったよ由生。私はサイズフォームだね。じゃあ尻尾切断は任せて。」

「ブリザード・バスター。」

「サイズ・スラッシュ。」

「フォトン・ランサー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン。グアツ！グアツ！グアツ！」

「今度は3連の炎攻撃か。でも当たらないんだなこれが。ブリザード・シューター。」
「サイズ・スラツシユ。」

「尻尾にフオトン・スラツシユ。」

「ギャオオン。スウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ。」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「尻尾は斬れたみたいだがここでブレスか。きついなやつぱりブレスはゴクツ！ゴクツ！ゴクツ！アルフ、フェイト。」

「ゴクツ！ゴクツ！ゴクツ！これでやつと本体に攻撃できる私は。」

「ゴクツ！ゴクツ！ゴクツ！あたしはこれで2回目のブレス攻撃だよ。由生がいてくれて助かったよ。」

「フェイトも回復薬グレートは持つてるだろ？後で渡してくれ。あとフェイトも栄養剤グレートとマンドラゴラで調合しておいてくれある人の分が必要になってくるから。ブリザード・スラツシユ。」

「フオトンランサー・フアランクスシフト。」

「フォトン・ランサー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。ハアハアハア。」

「ブリザード・バスター。」

「スパーク・エンド。」

「スパーク・スマッシュャー。」

「グオオオ。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「フエイトジュエルシードを。」

「ジュエルシード封印。」

「SEALING」

「これでやっと終わったね由生、フエイト。しかしこれで一気に3個かく青があと1個で赤があと1個だけ？青がまだまだかかるね。」

「しかし、ここで赤2個回収できたのは大きいかな？できれば最後まで赤は残したくない。」

「赤は由生に全部回収させたいね出来れば。それから青はいくつかはこの分だと由生が言う通り海かな？。しかし、ちよつとばかり疲れたね今回は。はい由生回復薬グレー」

ト30本ね。」

「すまねえなフェイト。少し休んだら次のジュエルシード求めていくか。」
「うんそうだね由生。」

そして時間は過ぎていく

ジュエルシード冰山の一角そして飛竜種の登場なの

SIDEフェイト

「そろそろ休憩も十分したし次に行かないか？それと回復薬グレートありがとうなフェイト。」

「ううん由生こっちこそ協力してくれてありがとうね。由生のおかげでだいぶ助かってるよ私もアルフも。」

「フェイトがこんなに笑うようになったのも由生のおかげだしね。ああそうだと由生転送魔法覚える気ないかい？今後は転送魔法があった方が便利だしね。」

「すまねえなアルフ。じゃあ行く前に転送魔法だけ覚えていくか術式だけでも教えてくれこっちな。」

「そういう事なら私も教える側に回るね由生。私とアルフで教えた方が速いから。」

「じゃあすまんがよろしく頼むぜフェイト先生、アルフ先生。」

その頃アースラでは

SIDEなのは

「ジュエルシードの反応2個見つけ近くにフェイトちゃん達はいないし、取るなら今

の内だね。ただ寒い場所にはなるけどね何しろ場所が関東だけど群馬県の赤城山って場所みたいだから。」

「海鳴市からだいぶ遠い場所ですネそうになると。それで今日は誰が居残りですか？ エイミイさん。」

「今日は寒い場所になるし3人揃って出撃した方が良いと思うんだけどどうかな？ クロノ君。」

「今日ばかりは3人揃って出撃の方が良いだろうな。山の中で遭難でもされたら厄介だし……」。僕も念の為にしよう今日は。」

「ありがとうクロノ君。これで思いつきりやれるなの。頑張ろうねアリサちゃん、すずかちゃん。」

「もちろんよなのは、どんな異相体が来たってあたしが戦陣を切るわ。先鋒はあたくして決まってるしね。」

「私はアースラに来てから初めての出撃だからアリサちゃん程やる気にはなれないけど、それでも私も頑張るねなのはちゃん。」

「女の子を守るのは男の役目だ、そのフェレットもどきと犬もどきもそれぞれ頑張るようにな。」

「誰がフェレット（犬）もどきだこの野郎。僕（俺）にはユーノ（シャーク）って立

派な名前があるんだ(よ)。」

「大丈夫だ場を和ます軽いジョークだ。これで緊張も解けただろ。さあ早速出撃するぞ皆で。」

「じゃあ気を付けてねなのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、アイリちゃん。女の子にはちよつと寒すぎるかもしれないけど我慢してね。」

「さて、ジュエルシードの異相体は今日はなんだ？この前みたいなりオレウスって奴じゃないと良いんだが……」

「あれってベリオロスにティガレックス？よりもよつてあの2頭だなんて……、かなり強いよあの2頭は。」

「じゃあまずはティガレックスってのから片付けようかアリサちゃん、すずかちゃん、クロノ君。咆哮にさえ気を付ければそんなに火力はないだろうしあとは岩飛ばしてくるからねティガレックスは。」

「フレイム・シューター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「この咆哮は開幕の咆哮だけど、ダメージ判定あるから気を付けてね皆。ディバイン・バスター。」

「フレイム・スラツシユ。」

「アイス・バスター。」

「ステインガー・レイ。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。グ
 アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「3連続の突進なの。皆避けにくいから注意してなの。当たらないなの。」

「今度は僕か、よつと。」

「最後はあたしね、よつと。」

「デイバイン・シューター。」

「フレイム・シューター。」

「アイス・シューター。」

「ステインガー・スナイプ。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。グ

グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア。」

「岩投げね。当たればスタミナ奪われちゃうけど、

きやあああああああああああああああああああああ。

「アリサちゃん。」

「ブレスー！しかも横薙ぎの。きやああああああああああああああああああああ（ぐああああああああああああああああああ）。」

「だけど相手も弱って来てるこれでトドメだスティング・スナイプ。」

「フレ임・シューター。」

「アイス・バスター。」

「デイベイン・バスター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「アリサちゃん、すずかちゃんデバイスで触れて。」

「SEALING」

「何とか2個獲得これで3個獲得か今までの分と合わせて。しかし異相体が結構強いな。異相体によってパワーが強かったり、素早かったりで僕はついていくのがやっつとだよなのは、アリサ、すずか。」

「これくらいはまだ軽い方だよ。存在するだけで天変地異起こすモンスターもいるからね異相体になった場合だけだよ。」

「存在するだけで天変地異だって？どんなモンスターだよそれは。しかしこれであと

青が9個、赤が1個ってなったな。やはり向こうも隠れながら集めているんだろうな。ジユエルシードを。さて、少し休憩したら回収してもらおうとしようかアースラに。」

「今回も色々とくたくたよあたしは危なく氷漬けになる所だったしね。」

「アリサちゃんが氷やられになった時はずいぶん焦ったよ。正直きつかった。次回もこうならないと良いんだけどね。」

「正直これは厳しいねこれで古龍なんて出てこられたら……考えるだけで恐ろしいねアリサちゃん、すずかちゃん。」

「その古龍ってのはいったい何なんだ？なのは。」

「さっき話した存在するだけで天変地異を起こすモンスターだよクロノ君。まだ出てきてないけど出てこられたら共闘しても勝つのは難しいと思う。」

「クロノ君、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんそろそろ回収するねアースラに。あとは自室でゆっくり休んでね。」

「すまないエイミイ今回は疲れたよ僕は。早めに回収してくれると助かる。」
そしてアースラに回収され時間は過ぎていく

死闘海鳴市、火山での激闘なの

SIDEフェイト

「転移魔法習得まで付き合ってくれてありがとうなフェイト、アルフ。きて、ジュエルシードの反応が出た、どうやら火山の中にあるらしい厄介な事になったなフェイト、アルフ。」

「火山の中かくそいつはちと厄介だねえ〜いつ噴火するか分からないし噴火する前に回収できれば良いんだけどねえ〜。」

「由生が氷属性の魔法使えるけど、噴火した溶岩を凍らせられるって保証はないしちよつと厄介だねやつぱり。由生が凍らせられるならそんなに厄介じゃないんだけど。」

「流石に溶岩を凍らせるってのはキツイね俺も、まあ異相体次第なんだけどな溶岩で戦うかどうかは、できればヴォルガノスやアグナコトルじゃなければいいんだが……。」

「由生それフラグでしょ？そんな事言っていると本当にそうなっちゃうよ！フラグ建てないでくれるかな？由生。」

「フォトン・ランサー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ン。」

「ブレスか。でも遅いよそのブレススピードじゃ。フリーズ・シューター。」

「サンダー・レイジ。」

「ライトニング・フォール。」

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ン。」

「おっと突進か。そして溶岩が固まってきたようだなこれでアルフは殴れるな。フ
リーズ・スラッシュ。」

「サイズ・スラッシュ。」

「魔力を込めた必殺パンチ、バリア・ブレイク。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ン。」

「アグナコトルは突進かブレスか溶岩に潜るくらいしか攻撃方法がないからな。溶岩
に潜ったか今度は。3回飛び出してくるから避けるよフェイト、アルフこれはランダム
ターゲットだよっと。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「開幕の咆哮かここからが始まりだな。フリーズ・バスター。」

「サンダー・スマツシャー。」

「フォトン・ランサー。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。ブンツッ！ブンツッ！」

「尻尾振つてきやがったよこいつ。フリーズ・スラツシュ。」

「スパーク・スマツシャー。」

「バリア・ブレイク。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。グアッ！」

「そんな単発の炎には当たらねえよ。これでもくらいなっフリーズ・シューター・バニ
シングシフト。」

「フォトン・ランサー。」

「ライトニング・フォール。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。ン。
ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「当たらないよでかぶつ。しかしまだまだ体力あるとはタフだねえこいつ。バリ

「フェイトジュエルシード回収だ。」

「うん由生。ジュエルシード封印。」

「SEALING」

「今回はそんな強敵はいなかったな。これで残るは青が8個だけか、残りは海かな？
こりゃあ。」

「海の方にサーチャー飛ばしてみるね由生。もし海だったら魔力不足になりやすいね
私達3人だけじゃ。」

「アルフも厳しいかもなフェイト。俺も正直8個同時に相手するのは厳しすぎる魔力
がそんなにある訳じゃないからな俺も。正直俺よりフェイトの方が魔力はあるぞ。」

「由生確かに普段は私よりも魔力少ないから強制発動しただけで魔力切れそうだよね
この場合。まあ由生に強制発動させたら落ちるしなくなるからやらせないけど。」

「海の場合は水が異相体になるだろうから色々やりにくそうだねえくやつぱり。水
のモンスターって何がいたっけ？フェイト、由生。」

「海のモンスターといったら俺が真つ先に思いつくのはザボアザギルとあとはラギア
クルスとかダイミヨウザザミ等だな。どれが来ても厄介にはなるが。」

「サーチャー結果が来たよ由生。やつぱり残り7個のジュエルシードは海にあるのは
間違いないね由生。」

「やっぱり海か。こうなつたら半分ずつに分けて俺とフェイトで魔力撃ち込むしかないね。半分なら魔力切れにはならないからさお互いに。」

「あたしも魔力撃ち込むからねフェイト、由生。そうすれば魔力は結構残るから戦いやすいはず。3人でも頑張ろうねフェイト、由生。あたしとフェイトでサンダー・レイジを由生のフリーズ・バスターで何とか発動は出来るはずさ。」

「その後は残つた魔力で一気に封印出来れば最高だなフェイト、アルフ。まあおそれなく管理局も海に来るだろうから管理局と共闘になりそうだけどなそれがなのは達なら尚更都合が良いけどな俺らにとつては。」

「あの娘達かくあの3人のおチビちゃん達は役に立つのかい？由生。」

「あの3人はああ見えても管理局が欲しがるほどの魔力総量だぜ？役に立たないって事はないだろうな俺と比べたらだが……?。」

「なのは達かく名前だけは知ってるけど氷と炎と無属性だったつけ？由生。」

「ああその通りだぜフェイト。あの3人の属性はそれであつてる。まあ3人の内アリスが炎だから水のある場所じゃだいたい役立たずかもしれないけどな。」

「あく確かに水のある場所で炎っていうと色々大変だし役に立たないかも……。」
「水のある場所で炎は相性最悪だねえ、確かに。まあアリスつてのには大人しくしてもらうしかないね。」

そして舞台は海へと続く

最終決戦海の上での共闘なの

SIDEなのは

「私達が手に入れたジュエルシードは3個、フェイトちゃん達が手に入れたジュエルシードは推定5個残りのジュエルシードは7個。」

「残り7つのジュエルシード見つからないわね。」

「搜索範囲を海の方まで広げています艦長。暫く待てば反応が出てくるかと。」

「しかし、あたし達の出撃もここんところないし暇よねえくなのは。フェイト達の動きも管理局のサーチャー潜り抜けて5個回収してるみたいだし、どうにも数が足りないわよねえくこつちのジュエルシードが。あたし達が持つてるジュエルシードつてなのは、あたし、すずか合わせても6個くらいだもんねえく。」

「私達がここまで集められなかったのも訓練の差だし仕方ないよアリサちゃん。なのはちゃんしか封印出来ないのもこつちとしては厳しい状況だしね。フェイトちゃん側もフェイトちゃんしか封印出来ないしどつちもこればかりはどうしようもないよねえく。」

「なのはももう少し強くなれたらフェイトちゃん達にこれほど奪われてる状況には

なっていないなの。なのは力不足のせいでごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。」

「ごめんは言いつこなしよなのは、あたしももう少し強ければ……なののは手伝いももう少し出来たはずなんだけど……。」

「ごめんは言いつこなしだよなのはちゃん。私ももう少し強ければ……なののはちゃんの手伝いもつと出来たはずなのに……。」

「ジュエルシードはやっぱり海なのかな？こうなつてくると。」

「ビー、ビー、ビー。」

「いったい何なのよこの警報は。」

「とりあえずブリッジに行つてみようアリサちゃん、すずかちゃん。」

「リンデイさんこの警報はいったい何が？つてフェイトちゃん達まさか……。」

「なんとも無茶な事する娘達ねえ、彼女達もまあこのまま魔力が尽きたところを捕縛するとしましょう。」

「でもそれじゃあフェイトちゃん達は。このままじゃ……。」

「待て君達何処へ行くつもりだ？まさかとは思うが……。」

「このままじゃフェイトちゃん達が。」

「なのは行つて。僕がゲートを開くからこのまま3人はフェイト達の元へ」

「ユーノ君良いの？このままじゃユーノ君が。」

【僕は大丈夫だから行ってなのは、アリサ、すずか。】

「私達はこのまま見ているなんて事出来ないの。ここで命令拒否権を行使させていただきます。行く。アリサちゃん、なのはちゃん。」

「待て君達は……」

「高町　なのは。」

「アリサ・バニングス。」

「月村　すずか。」

「二命令拒否権により勝手な行動を取らせていただきます。」

その頃海では

SIDEフェイト

「ハアハアハアやつぱり3人で力を合わせて魔力撃ち込んでみたけどジュエルシード7個の同時発動は思ったよりも魔力を持ってかれたね由生、アルフ。」

「ハアハアハア結構魔力持つてかれたなこれはキツイ。魔力がもう殆ど残ってねえや俺。ジュエルシードの異相体は今回は7個同時発動の為に7個のジュエルシードが1つになってしまったか。」

「これはまずいね。7個のジュエルシードが1つになっちゃったか。で由生あの異相体は？見たことないモンスターなんだけど……」

「あれは、まさかそんな馬鹿な。あれは間違いないネロ・ミエールじゃないか。なんだってネロ・ミエールに。」

「由生ネロ・ミエールって何?。」

「あれは最近の作品で出てきた水の古龍なんだフェイト。水の攻撃がメインなんだが、雷を纏った攻撃もしてくるんだあいつはなフェイト。」

「あれを封印するには魔力が足りない。でもやるしかないね由生、フェイト。魔力を受けれる状況になれば良いんだが。」

「デイバイン・バスター。」

「フレイム・シューター。」

「アイス・バスター。」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ。」

「これってまさか。フェイトと由生の邪魔をするなあく。」

「違う僕達は君達の邪魔をしに来たんじゃない僕達は。とにかく一緒にあってアレを止めないと。」

「チェーン・バインド。」

「二(由生(君)、フェイト(ちゃん))。二」

「まずは魔力の回復だねフェイトちゃん。デイバインド・エナジー。」

